
比企郡小川町

日向遺跡Ⅱ

地方特定道路(改築)整備工事(埋蔵文化財発掘調査(整理)業務委託)報告
主要地方道熊谷小川秩父線/比企郡小川町中爪地内

2007

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 日向遺跡遠景 (北東から)



2 日向遺跡遠景 (北西から)

序

埼玉県は、「ゆとりとチャンスの埼玉」を将来像として目指しています。この将来像を実現するため、このたび4つの「埼玉安心戦略の体系」を示し、全ての項目に「戦略指標」を掲げました。そのうちの一つに人々が活発に交流できる交通環境の整備を目指す「戦略4地域の魅力 創造戦略」があります。「どこでも楽々行ける」、「渋滞のない円滑な自動車交通」の実現のため、また県内のどの地域にも予定した時間通りに移動でき、人々の豊かな交流や活発な経済活動を支える道路網を整備する具体的な取り組みとして、高速道路インターチェンジへのアクセス道路の整備をあげております。

小川町と嵐山町とを結ぶ「地方特定道路」は、関越自動車道小川嵐山インターチェンジへのアクセス道路として計画され、平成6年度から事業に着手し、同インターチェンジの整備にあわせ供用開始しました。このバイパス道路を整備することにより、産業・文化・物流の拠点として、比企地域の活性化に大きく貢献するものと期待しております。

さて、このバイパス道路の整備予定地周辺には、先人たちの歴史を今に伝える遺跡が多数あり、その幾つかは発掘調査され、貴重な成果があがっております。

日向遺跡は、地方特定道路用地内に所在し、その取り扱いについて、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることとなりました。発掘調査は、埼玉県土木部道路建設課（当時）の委託を受け、当事業団が実施しました。

調査の結果、縄文時代の埋甕、中世の井戸跡や溝跡、さらに墓と思われる土壌などが発見され、縄文土器や石器、平安時代の須恵器・土師器をはじめとして、中・近世の陶磁器類やカワラケ、漆椀などの貴重な遺物が出土しました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護・普及ならびに啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、小川町教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年2月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 福田 陽 充

例 言

1. 本書は、埼玉県比企郡小川町大字中爪字榎戸126-1番地ほかに所在する日向遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と、代表地番及び発掘調査に対する指示通知は以下のとおりである。

日向遺跡第2次（HNTⅡ）
平成14年4月30日付け教文第2-6号
3. 発掘調査は、地方特定道路（改築）整備工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県土木部道路街路課（当時）の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査事業は、I-3の組織により実施した。
5. 調査は、瀧瀬芳之、松岡有希子が担当し、平成14年4月8日から平成14年5月31日まで実施した。
6. 整理・報告書作成事業は、鈴木孝之が担当して、平成18年10月2日から平成18年12月28日まで実施し、平成19年2月28日に報告書を刊行した。
7. 遺跡の基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。
8. 遺跡の空中写真は、株式会社東日本朝日航洋に委託した。
9. 発掘調査時の写真撮影は瀧瀬、松岡が行い、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
10. 出土遺物の整理、および図版の作成は鈴木が行い、遺構図版に関しては清水慎也の協力を得た。
11. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、その他は鈴木が行った。
12. 本書の編集は、鈴木が行った。
13. 本書に掲載した資料は、平成19年1月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
14. 本書の作成にあたり、浅野晴樹、小川町教育委員会のご協力をいただいた。

凡例

1. 本書におけるX・Yの数値は、2000年以前の日本測地系（旧測地系）による平面直角座標第IX系（原点：北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値（m）を示し、各挿図内における方位は全て座標北を示している。

L-66グリッドにおける日本測地系（旧測地系）での座標値と、北緯・東経値は、

X = 7050.0m Y = -47600.0m

北緯36° 03′ 44″ 58571

東経139° 18′ 17″ 54828である。

同グリッドにおける世界測地系（新測地系）での座標値と、北緯・東経値は、

X = 7405.5353m Y = -47892.9335m

北緯36° 03′ 56″ 04625

東経139° 18′ 05″ 99215である。

2. 遺跡におけるグリッドは、前記の座標系に基づいて設置し、10m×10mを基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は北西杭を基準とし、東西方向は西から東へアラビア数字で番号を付し、南北方向は南から北へアルファベット（大文字）を付した。
4. 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。

SD 溝跡

SK 土壌

SX 性格不明遺構

SE 井戸跡

P ビット

5. 挿図の縮尺は、各図版中に示した。

【遺構図】

全体図……………1/60

土壌・井戸跡…1/60

溝跡……………平面：1/150 断面：1/50

ビット……………1/60

【遺物】

土器……………1/4

石製品……………石鏃：2/3 凹石：1/3

砥石・磨石：1/4

木製品……………1/6・1/8

6. 遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにした。
7. 遺構断面図等に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
8. 遺物観察表については以下のとおりである。
- ・口径・底径・器高はセンチメートル(cm)、重さはグラム(g)を単位とする。
 - ・法量を示す()内の数値は復元推定値を意味する。
 - ・残存率は、あくまでも目測によるもので、5%刻みで表した。
 - ・焼成は、良好・普通・不良の3段階で示した。
9. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を使用した。
10. 土層および土器類の色調の表記は、「新版標準土色帖」2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に従った。

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	2. 中近世の遺構と遺物	19
1. 発掘調査に至る経過	1	(1) 土壌	19
2. 発掘調査・整理報告書作成の経過	2	(2) 井戸跡	27
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(3) 溝跡	30
II 遺跡の立地と環境	4	(4) 竪穴状遺構	32
III 遺跡の概要	9	(5) ビット	33
IV 遺構と遺物	17	(6) グリッド出土遺物	37
1. 縄文時代の遺構と遺物	17	V 調査のまとめ	38
(1) ビット (埋壳)	17	引用・参考文献	41
(2) グリッド・その他の遺物	17	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第14図 土壌出土遺物	26
第2図 周辺の遺跡	6	第15図 井戸跡	28
第3図 調査区周辺の地形	10	第16図 井戸跡出土遺物	29
第4図 基本土層図	11	第17図 第1号溝跡出土遺物	30
第5図 調査区全体図	12	第18図 溝跡	31
第6図 D区全体図	14	第19図 竪穴状遺構	32
第7図 E区全体図	15	第20図 ビット (1)	34
第8図 F区全体図	16	第21図 ビット (2)	35
第9図 縄文時代のビット	17	第22図 ビット (3)	35
第10図 縄文時代の遺物	18	第23図 グリッド・表採出土遺物	36
第11図 土壌 (1)	20	第24図 E区出土遺物	37
第12図 土壌 (2)	22	第25図 小川町教委1次・事業団2次調査地点	39
第13図 土壌 (3)	24		

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	8	第3表	E区出土遺物観察表	37
第2表	F区出土遺物観察表	37	第4表	日向遺跡新旧対照表	37

写真図版目次

図版1	D区全景(南西から)	第30号土壘
	E区全景(南から)	第33(左)・34号土壘
図版2	F区全景(南東から)	第35号土壘
	F区谷部(北西から)	図版6
図版3	L-64グリッドP4	第1号井戸跡
	第1号土壘	第2号井戸跡
	第2号土壘	第4号井戸跡
	第3(手前)・4号土壘	第5号井戸跡
	第5号土壘	第1号堅穴状遺構
図版4	第10号土壘	L-64グリッドP7
	第11号土壘	L-64グリッドピット群(西から)
	第12号土壘	F区溝跡(西から)
	第13号土壘	図版7
	第14号土壘	縄文土器1
	第15号土壘	縄文土器2
	第18号土壘	叢石
	第19号土壘	凹石
図版5	第22号土壘	打製石斧・石鏃
	第23(右)・24号土壘	図版8
	第27号土壘	須恵器(外面)
	第28号土壘	須恵器(内面)
	第29号土壘	図版9
		中・近世陶磁器(外面)
		中・近世陶磁器(内面)
		図版10
		中・近世陶器
		井戸跡・溝跡出土遺物

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、「彩の国5か年計画21」に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課では、これら県が実施する公共開発事業にかかる埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

主要地方道熊谷小川線工事事業に係る埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについては、平成12年3月10日付け道建第667号で道路建設課長から、文化財保護課長（当時）あて照会があった。

これを受けて文化財保護課では、試掘による確認調査を実施し、日向遺跡（Na35-21）の所在が確認された。平成13年11月5日付け教文第1061号で道路街路課長あて、埋蔵文化財の所在及び法手続きに関することとともに、その取り扱いについて、「工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施」することを回答した。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、川越県土整備事務所、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。その結果、発掘調査は、平成14年4月8日～平成14年5月31日の期間で実施された。

文化財保護法第57条の3（現第94条）の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から平成14年3月11日付け道街第945号で提出され、それに対する保護法上必要な勧告は平成14年3月20日付け教文第3-1089号で行った。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化財保護法第57条第1項（現第92条）の規定による発掘調査届が提出された。発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成14年4月30日付け教文第2-6号

平成14年5月29日付け教文第2-10号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

日向遺跡の発掘調査は、平成14年4月8日～平成14年5月31日まで実施した。調査面積は1,735㎡である。

4月8日に現場事務所を設置、10日に発掘器材の搬入を行うとともに、表土掘削を開始した。続いて15日より補助員による遺構に精査に着手し、22日には基準点測量を行った。

5月27日までに遺構の調査を終了した。翌28日には発掘器材の撤収を行うとともに、重機による埋め戻しを開始した。31日には現場事務所を撤去し、すべての作業を終了した。

その後、発見届けを小川警察署に、保管証を小川町教育委員会に提出した。

(2) 整理・報告書作成作業

整理作業は、平成18年10月2日～平成18年12月28日まで実施した。

10月2日から遺物の水洗・註記を開始し、続いて遺物の接合・復元作業を実施した。

遺構図面については、図面整理を経て、第二原図を作成し、スキャナーで取り込んだ後に、コンピューターによるトレース作業および土層註記等を挿入し編集作業を進めた。

遺物は、接合・復元が終了したものから実測作業に入り、10月下旬から併行してトレース・採拓をし、版下の作成を行った。

11月上旬に遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付と原稿執筆を進め、編集作業を行った。11月下旬に大部分の作業を完成させて、印刷業者選定し入稿した。3回の校正を経て、平成19年2月に報告書を刊行した。

入稿の前後に、本報告書で取り扱った図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成14年度)

理 事 長	桐 川 卓 雄
常務理事兼管理部長	大 館 健
(管理部)	
管 理 幹	持 田 紀 男
(調査部)	
調 査 部 長	高 橋 一 夫
副 部 長	坂 野 和 信
(調査第一担当)	
専 門 調 査 員	村 田 健 二
統 括 調 査 員	瀧 瀬 芳 之
調 査 員	松 岡 有 希 子

(2) 整理・報告書刊行 (平成18年度)

理 事 長	福 田 陽 充
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一
(総務部)	
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志
総 務 課 長	高 橋 義 和
(調査部)	
調 査 部 長	今 泉 泰 之
調 査 部 副 部 長 兼	
資料活用部副部長	小 野 美 代 子
主幹兼整理第一課長	磯 崎 一
主 査	鈴 木 孝 之

II 遺跡の立地と環境

小川町は、埼玉県のほぼ中央にあたる比企郡の北西部に位置している。北は大里郡寄居町、東は比企郡嵐山町、南は同郡玉川村・都幾川村、西は秩父郡東秩父村に接している。

地形的には、外秩父山地の北東部にあたる堂平山（標高875.6m）・笠山（標高837m）・金勝山（標高263.9m）等々が西に位置し、これらを水源とする槻川や兜川によって形成された盆地状の谷底平地（小川盆地）、比企北丘陵西端にあたる市野川とその支流による開析が進んだ小谷地形などに区分できる。

日向遺跡が立地する比企丘陵は、外秩父山地の外縁に形成された西高東低の丘陵部で、中央に菅谷・松山台地を挟んで、南北に大きく二分されている。北側の比企丘陵は、西から南東方向に流下する滑川・粕川・市野川・兜川・槻川などによって開析され、幾筋もの、低く細長い尾根筋が南東方向に連な

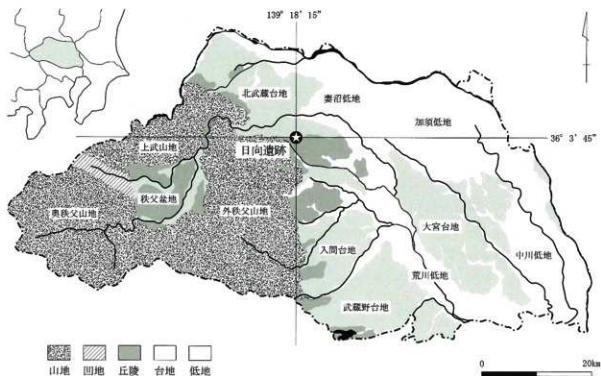
る景観を呈している。これらの小河川は、さらに南下と合流を繰り返し、やがて川島町内で荒川に合流する。

日向遺跡は、市野川とそれに流れ込む小河川によって開析された小支谷を挟む、台地から沖積地への移行部分に形成された遺跡といえる。遺跡は、市野川右岸の段丘面および支流の谷部、河岸段丘に続く小丘陵に立地している。今回の調査地点は丘陵の裾部にあたり、標高は約58～59mを測る。

比企丘陵内には、ゴルフ場、工業団地などの造成をはじめとする大型開発が進み、それに伴う大規模な発掘調査が行われている。その結果、従前の分布調査による認識とは、様変わりして来つつあるのが現状である。

以下に、日向遺跡(1)とその周辺遺跡を概観する。

旧石器時代の遺跡は、市野川上流域では寄居町牛



第1図 埼玉県の地形

無具利遺跡・稲荷窪遺跡、小川町内では後期旧石器時代中段階のものと思われる黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代草創期の遺跡は、嵐山町越畑城跡(79)で矢柄研磨器片が、小川町久保ヶ谷戸遺跡(55)では柳葉形の頁岩製土槍が出土している。早期では、嵐山町越畑城跡・同金平遺跡(100)・小川町日丸遺跡・町場遺跡・北蟹山堰遺跡(34)等がある。前期では、八幡台遺跡・平松台遺跡・日丸遺跡・大杉遺跡(38)・天神谷遺跡(30)・台ノ前遺跡(40)・中井遺跡(48)・悪戸遺跡(50)・日向遺跡がある。中期では、町場遺跡・台ノ前遺跡・北蟹山堰遺跡・宮子遺跡(57)・下原道北遺跡(13)・本宿前遺跡(61)・日向遺跡・天神谷遺跡・八幡台遺跡がある。後・晩期では、金平遺跡・町場遺跡・八幡台遺跡・中井遺跡・日向遺跡がある。

弥生時代の様相は明らかではないが、後期の越柿遺跡(53)・宮ノ脇遺跡(49)がある。

古墳時代については、前期の集落遺跡である越柿遺跡があり、峯原遺跡(47)・岡原遺跡では土器片が出土している。後期では、越柿遺跡・寿源寺遺跡(41)・中井遺跡・道下遺跡(36)・台ノ前遺跡のほか、新田古墳群・草加古墳群がある。

奈良・平安時代になると、遺跡数はさらに増加する。8世紀代の中井遺跡・台ノ前遺跡、8～9世紀代の日丸遺跡・越柿遺跡、8～10世紀代の六所遺跡・大杉遺跡、9～10世紀代の稲岡遺跡(53)、嵐山町では9～11世紀代の六丁遺跡(92)、小川町内では10世紀代の稲岡遺跡等がある。

中世になると、鎌倉街道上道が町内を抜けていくことによって、遺跡が増加する。12世紀後半では、鎌倉街道上道に近接する嵐山町行可免遺跡がある。行可免遺跡では、住居跡状の堅穴状遺構3基・井戸跡3基・土塼5基・溝跡11条と、掘立柱建物跡と思われる柱穴群が東西70m×南北50mおよび東西30m×南北50mの範囲から集中して確認されており、企画性の高い中世の遺跡であることが判明した。また、

『吾妻鏡』にも関連記事記載がみられる旧平沢寺僧坊跡群が存在する。確認調査の結果、12世紀～13世紀初頭にかけて構築されたと推定される一辺約10mの、東日本でも最大級の四面堂跡や池跡が検出され、旧平沢寺が浄土庭園を構成する大寺院で、秩父氏や畠山氏と関連の強い寺院であると推定されている。

13世紀代になると、小川町内の市野川沿いを走る鎌倉街道上道沿いで、常滑甕などが出土する遺跡が増加する傾向がみられる。小川町内では、鎌倉街道上道に伴うと思われる掘削状の遺構が、3箇所残されている。

13世紀後半以降の遺物は、六所遺跡・台ノ宮遺跡・日丸遺跡・久保ヶ谷戸遺跡などがある。六所遺跡では、9基の井戸跡が検出されているが、建物跡などの遺構は検出されていない。日丸遺跡では、ピット群内から青白磁合子や、15世紀代までの瓦質土器が確認されている。鎌倉街道上道沿いと推定されている嵐山町金平遺跡では、掘立柱建物跡や鑄造遺構群が検出された。また、この遺跡からは、弘安4(1281)年銘の鑄型が出土していることなどからも、鎌倉時代の工房跡と推定されている。なお、深沢遺跡(94)でも、13～14世紀の遺物とともに製錬滓と鑄型が検出されている。

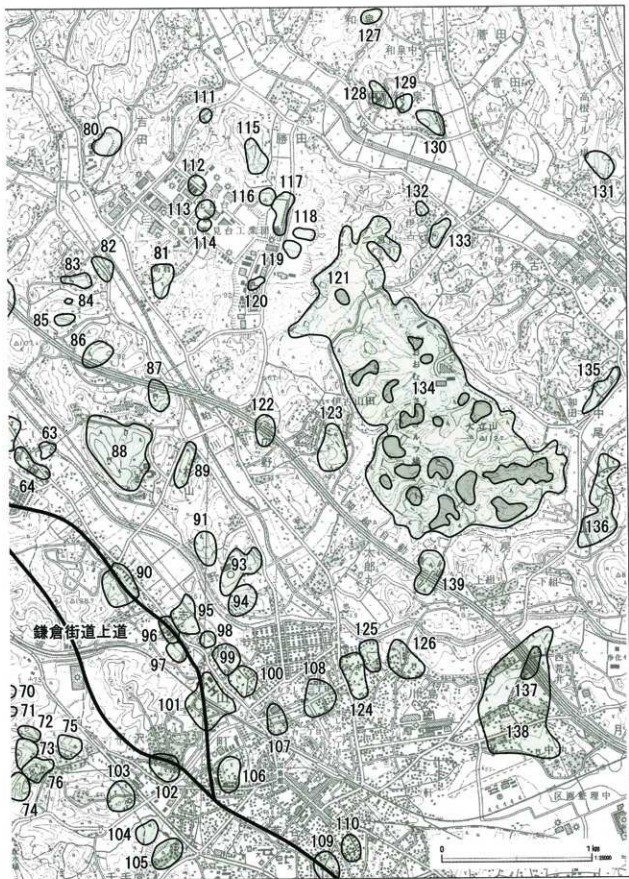
このように、中世関連の遺跡が多いことから、この地域が要所であったと見做される。

鎌倉街道上道沿いは、戦国時代においても後北条氏の支配制により、この街道を見張るように菅谷城・杉山城(87)・越畑城・高見城などが配置され、甲斐の武田氏・越後の上杉氏に対する防衛ラインとして機能していた。

現在までの知見からみて、日向遺跡とその周辺地域が、縄文時代以降、活発化するの奈良・平安時代以降といえる。その背景にある南比企窯跡群の創業と、東山道と結ぶ裏街道としての役割などにより、この地域は要所となっていった。さらに関東武士の登場以降、幾度か歴史の舞台となっていくのである。



第2図 周辺の遺跡



第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	日向遺跡		71	北山	縄文
2	耕地	古墳・奈良・平安	72	旧平沢寺僧坊跡群	平安・中世
3	神名沢B	縄文	73	入	
4	神名沢A	奈良	74	尾曾栗	縄文
5	味正作	奈良・平安	75	旧平沢寺僧坊跡群	平安・中世
6	塚城	縄文	76	旧平沢寺僧坊跡群	縄文・中世
7	下町	古墳	77	榑後谷津	縄文
8	神明河原	奈良・平安	78	大堂	縄文
9	河原	奈良・平安	79	越穂城跡	縄文・奈良・平安・中世
10	大沢	奈良・平安	80	山下	縄文
11	中島	奈良・平安	81	花見台	
12	川向井	縄文	82	北ヶ谷戸	古墳・奈良・平安
13	大豆五駄	縄文・平安	83	大木前	縄文・奈良・平安
14	平松台	縄文・弥生・平安	84	小栗北	縄文・平安
15	中の台	縄文・平安	85	小栗	奈良・平安
16	松の木	縄文	86	打越	縄文
17	仲道	奈良・平安	87	清明	縄文
18	下廣地	奈良・平安	88	杉山城跡	中世
19	上田中	奈良・平安	89	葉の峰	古墳
20	笠郷	縄文・奈良・平安	90	西町裏	縄文
21	間楨	奈良・平安	91	養賢ヶ谷戸	平安
22	東水穴	奈良・平安	92	釜石	縄文・平安
23	山下	奈良・平安	93	六丁	縄文・奈良・平安
24	和具B	奈良・平安	94	堂ヶ谷戸	古墳
25	和具A	奈良・平安	95	深沢	縄文
26	金山		96	向イ	縄文・奈良・平安
27	物見山	戦国	97	松原	縄文・奈良・平安
28	山根	縄文・平安・中世	98	辻	縄文・奈良・平安
29	関下	縄文・平安	99	久保前	縄文・平安
30	天神谷	縄文	100	本竹	縄文・平安
31	伊勢下塚		101	金平	縄文・平安
32	伊勢下		102	金井	縄文・平安
33	中谷津	縄文・平安	103	松葉	縄文
34	北蟹山	縄文	104	八千代山	平安
35	蟹山	縄文	105	原古墳群	古墳
36	道下	平安	106	中谷	縄文
37	片籠	縄文	107	吹上	縄文
38	大杉	奈良・平安	108	向原	縄文
39	岡原	縄文・奈良・平安	109	須賀谷原	中世
40	台ノ前	縄文・古墳・平安	110	大塚古墳	古墳
41	寿蓮寺	古墳・平安	111	泉蔵院跡	奈良・平安・南北・戦国・江戸
42	石塚	古墳	112	繁沢	弥生・奈良
43	行人塚古墳群	古墳	113	芳沼入	縄文・弥生・奈良・中世～近世
44	神戸古墳	古墳	114	芳沼入下	奈良
45	墓久保	平安	115	天神山古墳群	古墳
46	新屋敷古墳	古墳	116	大野田西	弥生・平安
47	塚原	縄文・古墳・奈良・平安	117	大野田	縄文・弥生・奈良・中世～近世
48	中井	縄文・古墳・奈良・平安	118	尺尻北	縄文・平安
49	宮の脇	弥生・奈良・平安	119	尺尻	旧石器・縄文・平安
50	黒戸	縄文・平安	120	新田坊	縄文・平安
51	経塚	平安	121	大平	旧石器・縄文
52	桶岡	古墳・平安	122	中郷	縄文
53	越林	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	123	金皿	戦国・江戸・中世
54	西圃岡	縄文	124	花見堂	縄文・古墳
55	久保ヶ谷戸	縄文	125	花見堂東	縄文
56	能満寺裏	平安	126	天沼	縄文・古墳
57	宮子	縄文	127	松原古墳群	古墳
58	高谷野	室町・戦国	128	巖山古墳群	古墳
59	内郷A	縄文・平安	129	船川	縄文・弥生・古墳
60	内郷B	平安	130	林島古墳群	古墳
61	本宿前	縄文・平安	131	西岡表	古墳
62	西ヶ谷戸古墳群	古墳	132	台沼古墳群	古墳
63	下原道北	縄文・平安	133	台沼古墳群	古墳
64	下原道南	縄文・奈良・平安	134	滑川・嵐山ゴルフコース内遺跡	旧石器・縄文・奈良・平安
65	池ノ入		135	広瀬	古墳・奈良・平安
66	祖父ヶ入 No.1	縄文	136	中屋古墳群	古墳
67	祖父ヶ入 No.2	縄文	137	原田	弥生・古墳・近世
68	祖父ヶ入 No.3	縄文	138	月の輪古墳群	古墳
69	外遺寺		139	寺の台	縄文・古墳
70	祖父ヶ入 No.4	縄文			

Ⅲ 遺跡の概要

日向遺跡は、比企郡小川町大字中爪字榎戸126-1番地他に所在する。遺跡は、市野川とそれに流れ込む小河川によって開析された小支谷を挟む、台地から沖積地への移行部分に立地する遺跡といえる。

遺跡の推定範囲は、東西約1km、南北約380mである。日向遺跡は、小川町教育委員会によりたびたび発掘調査が行われ、その成果が公にされている。

その概要に触れておきたい。第1次調査は、低台地状の丘陵を降りきった市野川の河岸段丘で行われ、掘立柱建物跡1棟、井戸跡7基、土壇100基・溝跡15条が検出されている。掘立柱建物跡は、桁行4間、梁行2間以上であるが、時期を示す遺物は確認されていないが、中世の館の可能性が考えられている。

井戸跡はいずれも13世紀中葉から14世紀代に納まり、青磁碗、在地産片口鉢、常滑甕・片口鉢、漆碗、すりこぎ、石硯、曲物ほかが出土し、全体的に遺物の出土は少ないが、中世の土壇墓と推定されている。

第2次調査は、台地頂部の東端で行われ、16世紀代を中心とした時期の方形区画を伴う屋敷跡のほか、弥生時代末期～古墳時代前期の土壇、中世前期の青磁片などが確認されている。

第3次調査はほぼ頂部を対象とし、中性の区画または道路に伴うと思われる溝跡が検出されている。縄文時代中期後半の土器・石器や、中世前期の青磁片が出土している。

第4次調査は、谷部を中心に行われ夥しい数の縄文時代中期の土器のほか、平安時代の住居跡や、墨書土器が埋納された井戸跡が検出されている。

第5調査は、ほぼ頂部の北向き斜面上部で行われ、縄文時代中・後期の土壇が確認されている。

第6調査は、頂部から南側斜面に移行する変換点にあたり、9世紀中葉の住居跡、9世紀前葉の土壇、中世の溝などが検出されている。

第7調査は、台地の突端部に近い位置にあたる。

9世紀後半の須恵器が出土した土壇のほか、遺物包含層からは縄文時代中期の土器や石器が確認されている。

ついで、事業団第1次調査についても概観しておく。調査区は3箇所に分かれており、便宜上A区～C区と命名されている。

A区南端部は、小川町教育委員会による第4次調査地点に近接している。A区は谷部、標高約66m、丘陵の頂部であるC区は標高約83mを測り、約17mの標高差がある。

検出された遺構は、奈良・平安時代の住居跡22軒、中・近世の溝跡13条、土壇100基、ビット85基などが挙げられる。炭焼窯5基については、出土遺物はなく、時期は不明である。

遺構は一定の場所に集中する傾向があり、遺構が検出されていない部分も多い。住居跡はA区の谷部・台地の一段高い部分、C区南側の3箇所に集中している。出土遺物としては、住居跡からは8世紀中頃～9世紀後半の土師器坏・台付甕・甕、須恵器坏・碗・蓋・甕のほか、灰釉陶器、紡錘車などが出土した。溝跡や土壇からは陶磁器・カワラケ・古銭などが出土している。

なお、埼玉県教育委員会の調査報告(埼玉県教委1983)のデータを基にすれば、鎌倉街道上道が、A区内を通過していたと推定される。

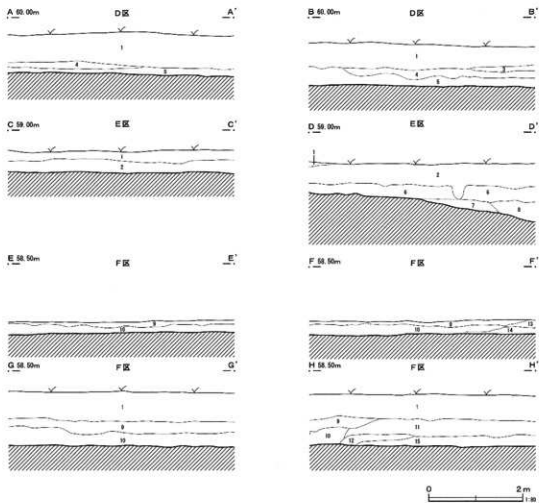
ここに報告する遺構と遺物は、当事業団としての第2次調査となる。調査区は3箇所に分かれているため、事業団第1次調査のA～C区に引き続き、D～F区と命名した。

調査区におけるグリッド配置については、通常、北から南へ、西から東へと振られるが、発掘調査時のグリッド配置を踏襲して、南から北へ、西から東へと配置することとした。



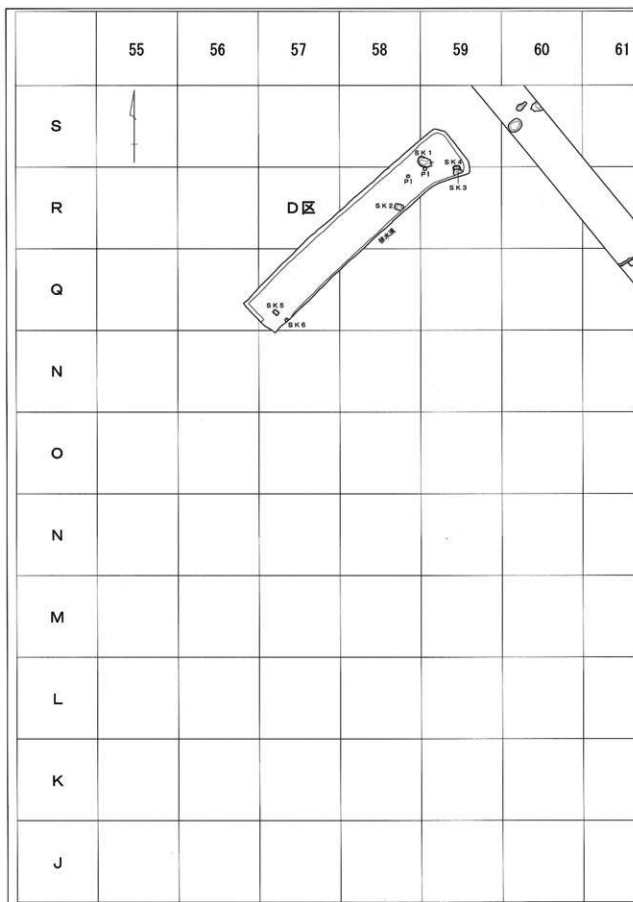
経路については、埼玉県教委1985より転載

第3図 調査区周辺の地形

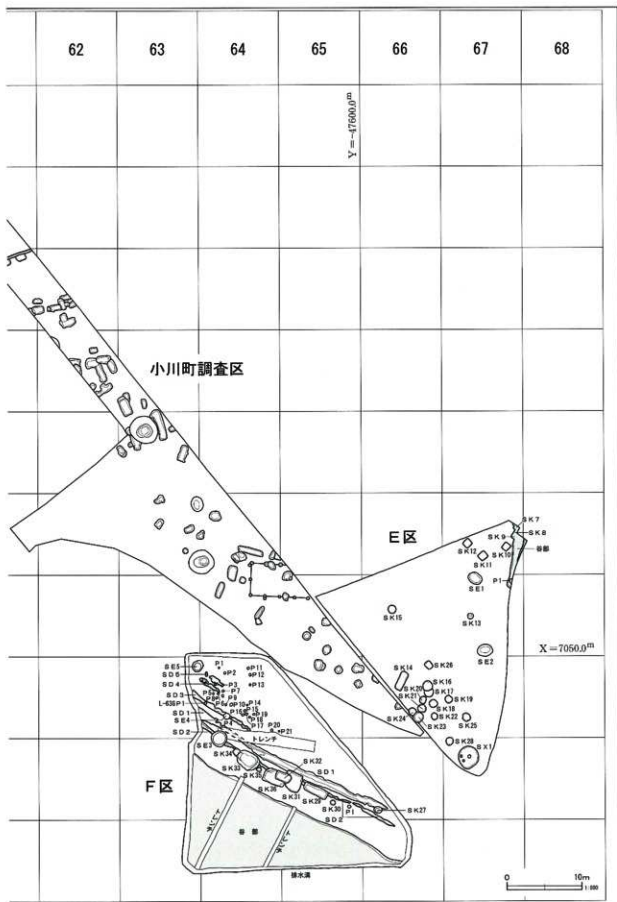


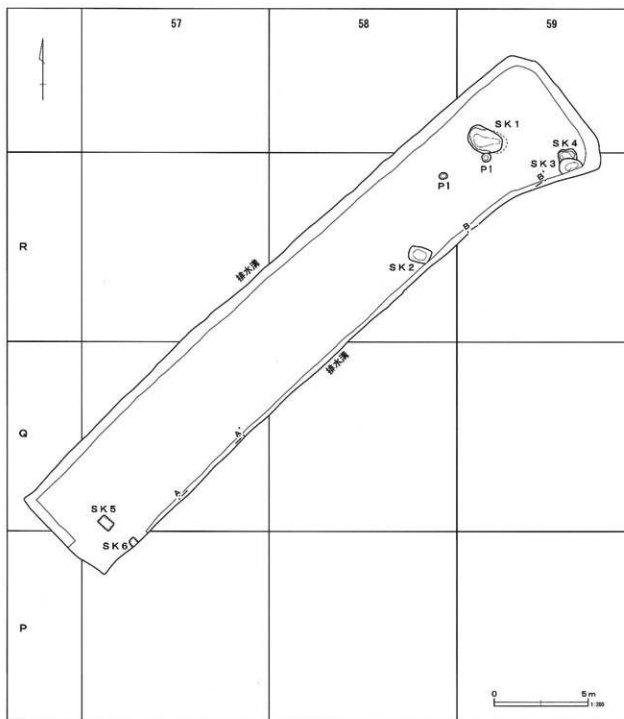
- | | | | | | | | |
|-----------|--------------------|-------------|--------------|----------|-----------|--------------|------|
| 1 褐色土 | 粘性弱 | しまりやや有 (黄土) | 9 黒褐色土 | 液閉日少 | 粘性やや有 | しまり有 | |
| 2 にがい黄褐色土 | ローム粒子少 | 粘性弱 | しまりやや有 (耕作土) | 10 暗灰色土 | 上部に高脚小礫多数 | 液閉日をブロック状に混入 | |
| 3 にがい黄緑色土 | 液閉日をブロック状に混入 (25%) | 粘性やや有 | しまり有 | 粘性強 | しまり弱 | | |
| 4 暗褐色土 | 炭化物微量 | 粘性有 | しまり強 | 11 黒色土 | 液閉日多 | 粘性強 | しまり有 |
| 5 にがい黄緑色土 | 粘土層 | 粘性・しまり強 | | 12 褐色土 | 粘性強 | しまりやや有 | |
| 6 黒色土 | ローム粒子微量 | 粘性・しまりやや有 | | 13 明黄褐色土 | 粘性・しまり弱 | | |
| 7 黒褐色土 | ロームブロック多 | 粘性有 | しまりやや有 | 14 灰色土 | 粘性強 | しまりなし | |
| 8 黒褐色土 | 粘性やや有 | しまり弱 | | 15 明黄褐色土 | 粘性強 | しまり弱 | |

第4図 基本土層図

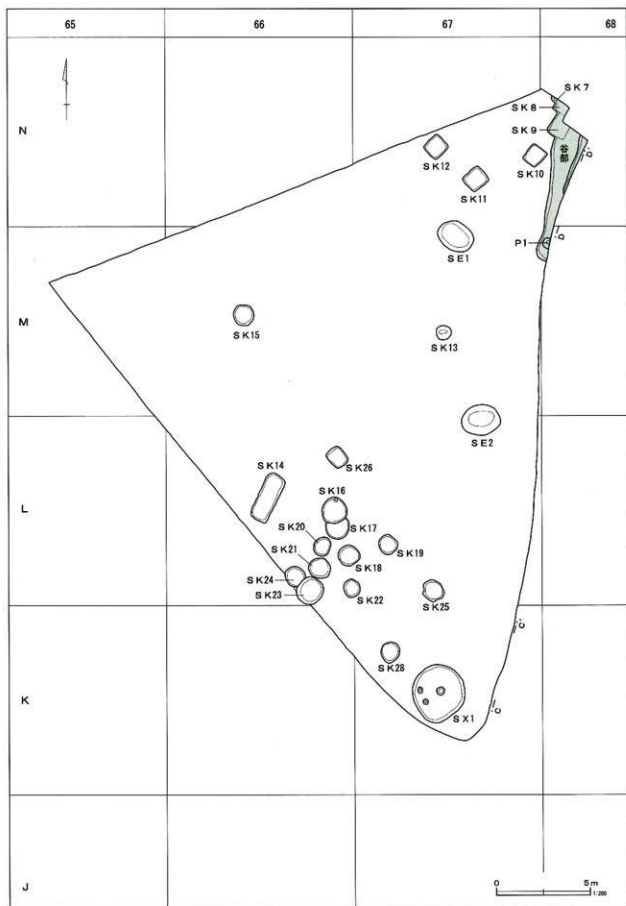


第5図 調査区全体図

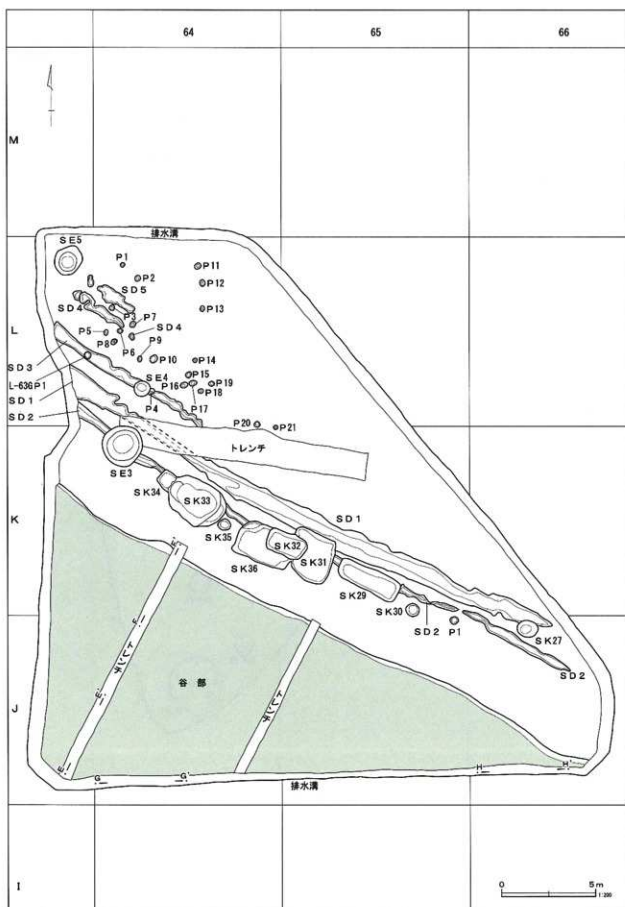




第 6 图 D区全体图



第7图 E区全体图



第 8 図 F 区全体図

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) ビット

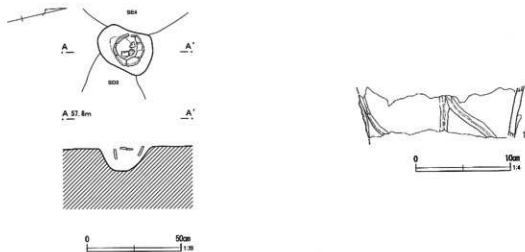
L-64グリッドP4 (第9図)

F区北西部の、L-64グリッドに位置する。第4号井戸跡、第3号溝跡と重複し、新旧関係は、同遺構よりも古い。遺構上部は第3号溝跡に壊されており、同遺構調査後、底面を精査して検出された。また遺構東側は第4号溝跡に掘削を受け、確認された埋設土器の一部が壊されている。

ビットの平面形は楕円形で、規模は、長軸92cm、短軸63cm、深さ12cmを測る。主軸方向はN-38°-E

を指す。

遺物は、縄文時代の埋設土器が確認されている。黒雲母と石英を大量に含む阿玉台式の深鉢胴部で、器高6cmで全周のうち80~90%が廻る。器面は風化・摩滅している。文様は4単位で、地文は無文である。隆帯により縦方向に区画を施し、これから斜方向の隆帯が派生する。縦方向と斜方向の隆帯結節点では、隆帯が肥厚し、ここから上位へ2本の隆帯が延びる。



第9図 縄文時代のビット

(2) グリッド・その他の遺物

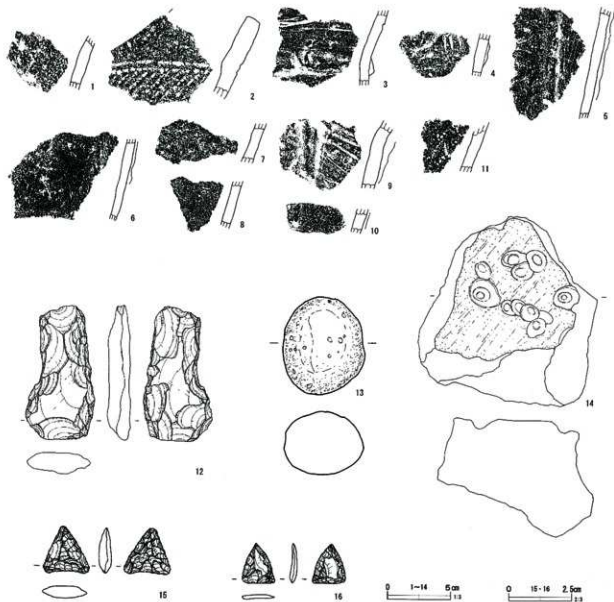
グリッドおよびその他の地点で遺物が出土している(第10図)。その他の遺物には遺構から出土したものも含まれているが、後世の流れ込みみであることが明らかなのはここへ帰属させた。1~11が土器、12~16が石器である。

出土地点は、1が第14号溝跡、4が第129号土壇、5~8が第4号井戸跡、10・13が第131号土壇、11がL-64グリッドP7、14は第129号土壇、15がJ-65一括、16がJ-66グリッド一括、2・3・9・12がF区一括遺物である。

1は繊維土器、2~8は阿玉台式土器、9は加曾利E式土器である。

1は繊維を多量に含む胴部破片で、地文は単節縄文RLを横位に施文する。

2は波状口縁部の破片で、胎土に多量の白色砂礫、少量の黒雲母を含む。波底部から横方向に2列の角押文が施され、下位に単節縄文LRを施す。口縁端部は角頭状に整形され、土器内面は外面の、角押文の横位列付近の高さまで水平に肥厚する。3は頭部破片で胎土に大量の白色砂礫、黒雲母を含む。頭部は無文で、上位は沈線、下位は隆帯を横走させ区



第10図 縄文時代の遺物

画する。4は隆帯により楕円形区画を施す。区画内は斜行沈線で充填される。5・6は同一個体の胴部破片で、縦方向に隆帯を施す。胎土に大量の黒雲母、少量の砂礫を含む。7、8は無文の胴部破片である。胎土に少量の砂礫、黒雲母を含む。

9は隆帯で縦位区画し、区画内に斜方向の沈線を施す。10は隆帯を垂下させた胴部破片である。胎土に砂礫を多量に含む。11は単節縄文LRが施される。胎土に多量の砂礫を含む。

12は砂岩製の打製石斧で、形状は楕形である。刃

部の調整がやや粗い。長さ10.5cm、幅5.5cm、厚さ1.8cm、重さ118.8g。13は球形の敲石で、長径7.7cm、短径6.5cm、厚さ4.9cm、重さ332.3gである。

14は凹石で11孔が確認される表面以外の各面が欠損している。長軸14.9cm、短軸14.2cm、厚さ10.8cm、重さ2383.7cmである。

15は基部に緩やかな抉りの入チャート製無茎石鏃で、長さ1.8cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ1.5gである。16は黒曜石製無茎石鏃で、長さ1.5cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gである。

2. 中世の遺構と遺物

(1) 土壌

第1号土壌 (第11図)

D区北東部の、R・S-59グリッドに位置する。R-59グリッドP1を切っている。平面形は、不整形円形を呈する。断面形は、底部が緩やかに窪み、壁面は垂直に近い立ち上がりをもっており、U字形に近い。

規模は長軸1.88m、短軸0.25m、深さ0.88mを測る。主軸方向はN-57° -Wを指す。遺物は出土しなかった。

第2号土壌 (第11図)

D区北東部の、R-58グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形はやや膨らみをもった長方形を呈する。断面形は、底面が平坦であり、立ち上がりの急な逆台形に近い。

規模は長軸1.16m、短軸0.83m、深さ0.62mを測る。主軸方向はN-71° -Wを指す。遺物は出土しなかった。

第3号土壌 (第11図)

D区北東部の、R・S-59グリッドに位置する。

調査に伴って設けられた排水溝のため、プランは部分的に失われている。第4号土壌を切っている。平面形は不整形円形と推定される。断面形は皿状を呈する。

検出し得た範囲内での規模は、東西0.9m、南北1.27m、深さ0.23mを測る。検出状況からみた主軸方向は、N-69° -Eを指す。遺物は出土しなかった。

第4号土壌 (第11図)

D区北東部の、S-59グリッドに位置する。第3号土壌に切られる。平面形は、隅丸の方形または長方形と推定される。断面形は、底面が平坦で、壁面がやや急角度で立ち上がる箱型を呈すると推定される。

検出された範囲内での規模は、東西1.00m、南北

0.46m、深さは0.22mを測る。検出状況からみた主軸方向は、N-69° -Eを指す。遺物は出土しなかった。

第5号土壌 (第11図)

D区南西部の、Q-57グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は、長方形を呈すると推定される。断面形は、底面が平坦な皿状を呈する。

規模は長軸0.73m、短軸0.5m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-45° -Wを指す。遺物は出土しなかった。

第6号土壌 (第11図)

D区南東部の、P-57グリッドに位置する。南東側は調査区外に続く。他遺構との重複関係はない。平面形は長方形を呈すると推定される。

検出し得た範囲内での規模は、長径0.42m、短径0.39m、深さ0.02mを測る。主軸方向はN-44° -Wを指す。遺物は出土しなかった。

第7号土壌 (第11図)

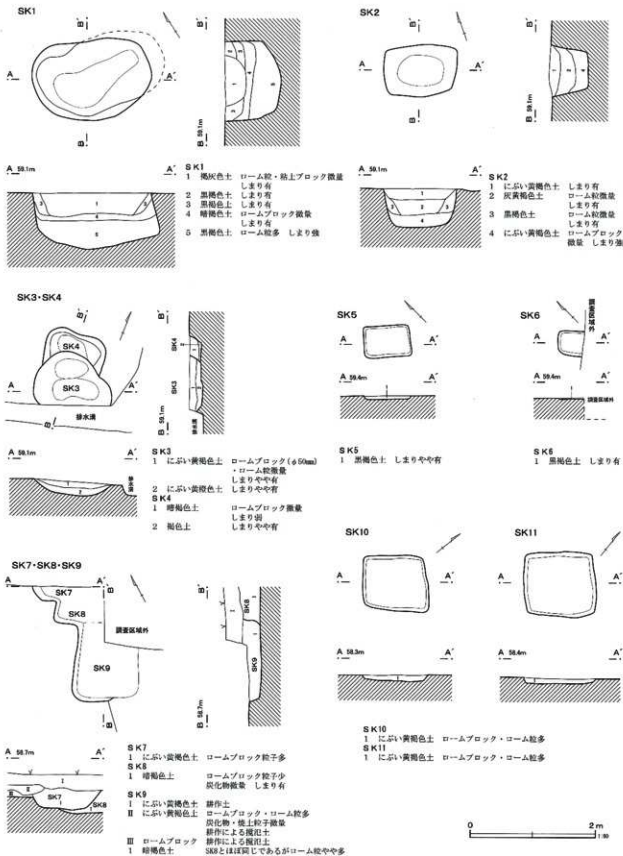
E区北東部のN-68グリッドに位置する。第8号土壌を切る。調査区外に延びるため、全体の平面形は不明である。断面形は、底面が緩やかに窪む逆台形を呈する。

検出し得た範囲内での規模は、長軸1.12m、短軸0.25m、深さ0.53mを測る。主軸方向は不明である。遺物は出土しなかった。

第8号土壌 (第11図)

E区北東部のN-68グリッドに位置する。南側部分は、調査区外に続いている。第7号・第8号土壌に切られている。土壌のコーナー部分が1箇所検出できたのみであるため、平面形は不明である。底面は比較的平坦である。

検出し得た範囲内での規模は、長軸0.84m、短軸



第11図 土壌 (1)

0.25m、深さ0.58mを測る。遺物は出土しなかった。

第9号土壌 (第11図)

E区北東部のN-68グリッドに位置する。北東コーナー部分は、調査区外に続く。谷地形に接しているため、東側プランの一部が失われている。

検出し得た範囲内での規模は、長軸1.31m、短軸1.06m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-29° -Wを指す。遺物は出土しなかった。

第10号土壌 (第11図)

E区北東部の、N-67・68グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は方形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈する。

規模は、長軸1.03m、短軸0.88m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-40° -Wを指す。遺物は出土しなかった。

第11号土壌 (第11図)

E区北東部の、N-67グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は方形に近い長方形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈する。

規模は、長軸1.15m、短軸1.05m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-51° -Wを指す。遺物は出土しなかった。

第12号土壌 (第12図)

E区北東部の、N-67グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は方形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈する。

規模は、長軸1.05m、短軸0.97m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-44° -Wを指す。土師器甕の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

第13号土壌 (第12図)

E区中央部の東寄り、M-67グリッドに位置する。

他遺構との重複関係はない。平面形は楕円形、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

規模は、長軸0.82m、短軸0.71m、深さ0.36mを測る。主軸方向はN-89° -Eを指す。遺物は出土しなかった。

第14号土壌 (第12図)

E区南西部のL-66グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は隅丸長方形で、断面形は底面が平坦な箱状を呈する。

規模は、長軸2.58m、短軸1.05m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-27° -Wを指す。遺物は出土しなかった。

第15号土壌 (第12図)

E区北西部の、M-66グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈する。

平面規模は1.05m×1.00m、深さは0.09mを測る。遺物は出土しなかった。

第16号土壌 (第12図)

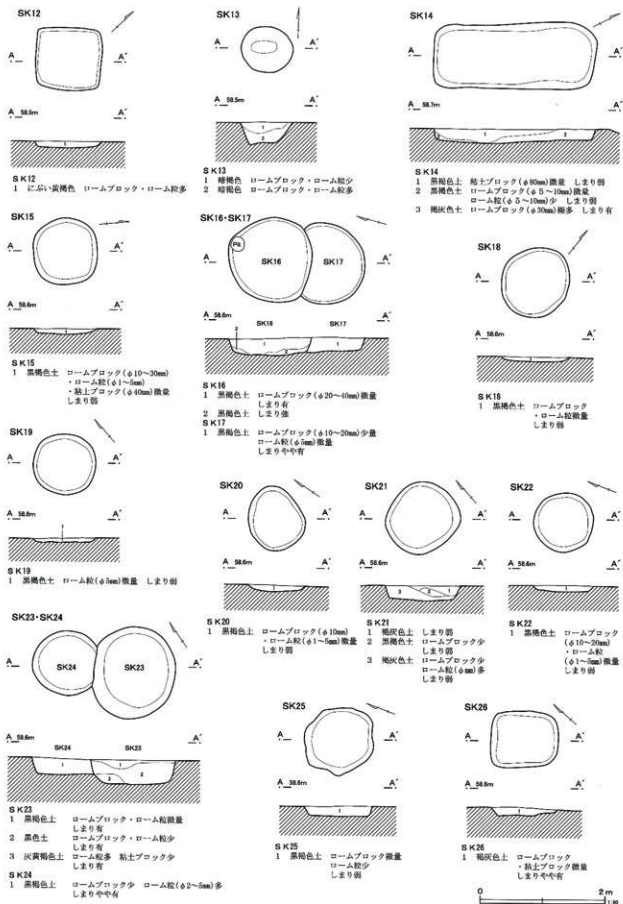
E区南西部の、L-66グリッドに位置する。第17号土壌を切っている。平面形はほぼ円形で、断面形は底面が緩やかに窪む逆台形を呈する。

平面規模は1.34m×1.32m、深さ0.27mを測る。土師器甕の小破片が2点出土した。

第17号土壌 (第12図)

E区南西部の、L-66グリッドに位置する。第16号土壌に切られている。平面形は、円形を呈すると思われる。断面形は、底面が緩やかに窪む逆台形を呈する。

平面規模は1.29m×(1.23)m、深さ0.27mを測る。土師器甕の小破片が2点出土したが、図化には至らなかった。



第12図 土壌 (2)

第18号土壌 (第12図)

E区南西部の、L-66・67グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形はほぼ円形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈する。

平面規模は1.2m×1.06m、深さは0.08mを測る。土師器甕・常滑産の甕の小破片が1点ずつ出土したが、図化には至らなかった。

第19号土壌 (第12図)

E区の南寄り、L-67グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈する。

平面規模は1.02m×0.96m、深さは0.07mを測る。遺物は出土しなかった。

第20号土壌 (第12図)

E区南西部の、L-66グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は楕円形で、断面形は底面が緩やかに窪む皿状を呈する。

規模は、長軸1.02m、短軸0.9m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-35°-Eを指す。土師器甕の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

第21号土壌 (第12図)

E区南西部の、L-66グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形に近い楕円形で、断面形は底面が緩やかに窪む皿状を呈する。

規模は長軸1.15m、短軸1.06m、深さ0.24mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。土師器甕の小破片が1点出土したが、図化には至らなかった。

第22号土壌 (第12図)

E区南西部の、L-66・67グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は底面が緩やかに窪む皿状を呈する。

平面規模は0.96m×0.94m、深さは0.1mを測る。遺物は出土しなかった。

第23号土壌 (第12図)

E区南西部の、L-66グリッドに位置する。第24号土壌を切っている。平面形は円形で、断面形は底面が比較的平坦な椀状を呈する。

平面規模は1.48m×1.3m、深さは0.40mを測る。土師器甕の小破片4点、陶磁器の小破片1点が出土したが、図化には至らなかった。

第24号土壌 (第12図)

E区南西部の、L-66グリッドに位置する。第23号土壌に切られている。平面形は円形、断面形は底面が比較的平坦な椀状を呈すると推定される。

平面規模は1.01m×(1.05)m、深さは0.40mを測る。遺物は出土しなかった。

第25号土壌 (第12図)

E区南部の、L-67グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形に近い不整形で、断面形は底面が比較的平坦な椀状を呈する。

平面規模は1.12m×1.10m、深さは0.16mを測る。遺物は出土しなかった。

第26号土壌 (第12図)

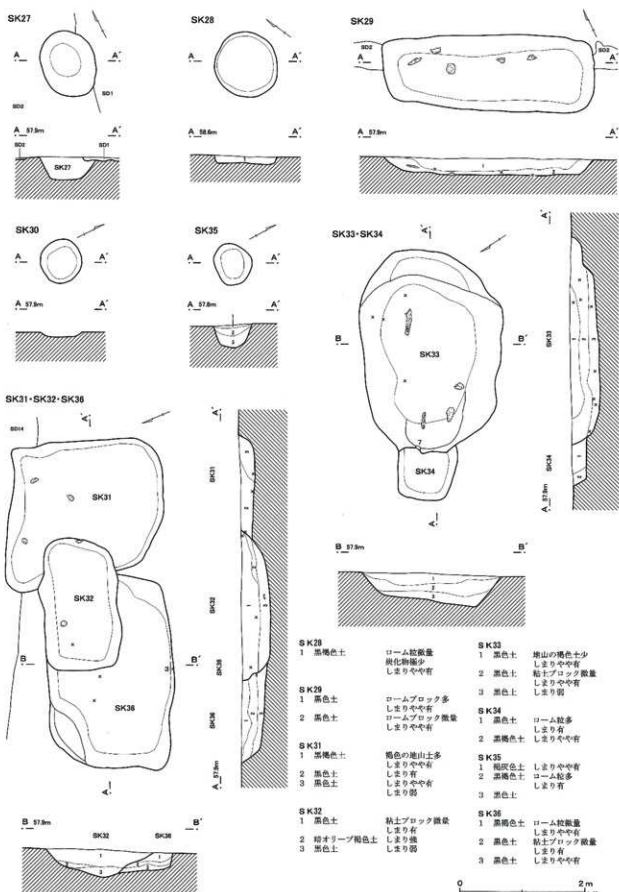
E区南西部の、L-66グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は隅丸長方形で、断面形は底面がやや波打つ皿状に近い。

規模は、長軸1.07m、短軸0.89m、深さ0.14mを測る。主軸方向はN-42°-Wを指す。緑泥片岩と磁器の小破片が1点ずつ出土したが、図化には至らなかった。

第27号土壌 (第13図)

F区南東部の、J-66グリッドに位置する。第1号溝跡に切られている。平面形は楕円形で、断面形は底面が比較的平坦な逆台形を呈する。

規模は、長軸1.08m、短軸0.87m、深さ0.36mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。緑泥片岩他石が十数点出土したが、図化には至らなかった。



第13図 土壌 (3)

第28号土壌 (第13図)

E区南部の、K-67グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は浅いU字形を呈する。

平面規模は1.02m×1.00m、深さは0.13mを測る。遺物は出土しなかった。

第29号土壌 (第10・13図)

F区南東部の、K-65グリッドに位置する第2号溝跡に切られている。平面形は隅丸長方形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈する。

規模は、長軸3.34m、短軸1.21m、深さ0.27mを測る。主軸方向はN-65°-Wを指す。

阿玉台期の縄文土器編1点(第10図4)と、窪石1点(第10図14 長さ14.9cm、幅14.2cm、厚さ10.8cm、重さ2.383.7g、雲母片岩裂)のほか、緑泥片岩4点、須恵器壺の小破片1点が出土したが、これらについては図化には至らなかった。

第30号土壌 (第13図)

F区南東部の、K-65グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状を呈する。

規模は、長軸0.68m、短軸0.65m、深さ0.07mを測る。遺物は出土しなかった。

第31号土壌 (第13・14図)

F区中央の、K-65グリッドに位置する。第2号土壌に切られている。平面形は隅丸方形に近い不整形で、断面形は底面が比較的平坦な逆台形と推定される。

規模は、長軸2.46m、短軸2.25m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-20°-Eを指す。

葎石が1点(第10図13 長さ7.7cm、幅6.5cm、厚さ4.9cm、閃緑岩裂)のほか、緑泥片岩2点が出土した。

第32号土壌 (第13図)

F区中央の、K-64・65グリッドに位置する。第31・36号土壌を切っている。平面形は隅丸長方形で、断面形は底面が比較的平坦な碗状形を呈する。

規模は、長軸2.15m、短軸1.22m、深さ0.46mを測る。主軸方向はN-72°-Wを指す。陶器の小破片と石が2点ずつ出土したが、図化には至らなかった。

第33号土壌 (第13・14図)

F区中央部西寄りの、K-64グリッドに位置する。第34号土壌を切り、第2号溝跡に切られている。平面形は不整形で、断面形は底面が比較的平坦な皿状もしくは碗状を呈する。

規模は、長軸3.22m、短軸2.28m、深さ0.47mを測る。主軸方向はN-58°-Wを指す。青磁壺の小破片が1点(第14図1)のほか、緑泥片岩などの石が十数点さらに漆碗から剥がれたと思われる漆の断片や自然木などが出土したが、図化には至らなかった。

第34号土壌 (第13図)

F区中央部西寄りの、K-64グリッドに位置する。第2号溝跡に切られている。平面形は隅丸方形、または隅丸長方形、断面形は底面が平坦な逆台形と推定される。

規模は、長軸0.93m、短軸0.77m、深さ0.23mを測る。遺物は出土しなかった。

第35号土壌 (第13図)

F区中央部西寄りの、K-64グリッドに位置する。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は壁面の立ち上がりの急なU字状を呈する。

規模は、長軸0.66m、短軸0.57m、深さ0.38mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。遺物は出土しなかった。

第36号土壌 (第13・14図)

F区中央部のK-64・65グリッドに位置する第32号

土壁に切られている。平面形は隅丸長方形で、断面形は碗状に近い。

規模は、長軸3.05m、短軸2.02m、深さ0.4mを測る。主軸方向はN-72°-Wを指す。

カワラケの破片が2点（第14図2・3）検出され

た。2は、口径(13.7)cm、器高2.3cm、焼成普通、橙色、残存率10%、手捏ね。時期は、13世紀前半と考えられる。3は、口径(10.5)cm、器高(2.5)cm、焼成普通、橙色、残存率10%、手捏ね。



第14図 土壁出土遺物

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第15・16図)

E区北東部の、M・N-67グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形はU字状を呈する。開口部径1.92m×1.46m、底面径1.54m×0.99m、確認面からの深さ1.28mを測る。素掘り。凝灰岩製の砥石1点(第16図1)と、礫が1点出土している。砥石は両端分を欠き、他の4面を研ぎ面としている。長さ8.5cm、幅2.1cm、厚さ1.5cm、凝灰岩製、灰オリーブ色。

第2号井戸跡 (第15図)

E区東部の、L・M-67グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形はU字状を呈する。開口部径2.07m×1.64m、底面径1.42m×0.89m、確認面からの深さ1.43mを測る。素掘り。礫が2点出土しているが、円化には至らなかった。

第3号井戸跡 (第15・16図)

F区西部の、K・L-64グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は漏斗状を呈する。開口部径2.19m×2.17m、中段部径1.77m×1.61m、調査最下面での径1.05m×0.98mを測る。確認面から深さ1.43mまでを調査したが底面には至らなかった。素掘り。板状木製品(第16図5)と、緑泥片岩を含む石が計3点出土している。板状木製品は長さ66.9cm、幅8.0cm、厚さ1.7cm、孔径0.6cm・0.4cm・0.4cmを測る。

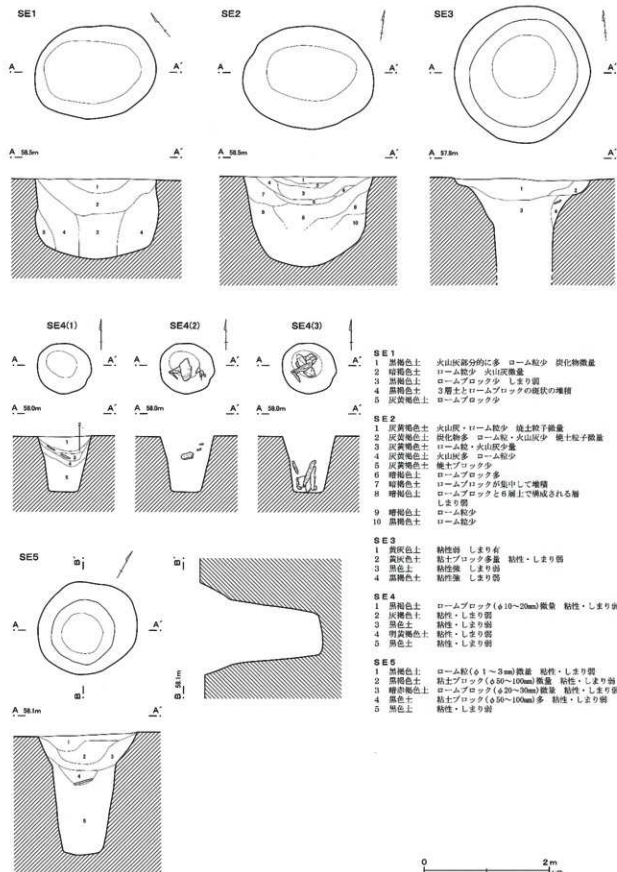
第4号井戸跡 (第15・16図)

F区西部の、L-64グリッドに位置する。第3号溝跡を切る。平面形は円形で、断面形は立ち上がりの急な逆台形を呈する。開口部径0.86m×0.80m、底面径0.49m×0.37m、確認面からの深さ0.87mを測る。素掘り。阿玉台期の土器破片4点(第10図5～8)と、板碑の破片の可能性をもつ緑泥片岩3点を含む石が計9点、さらに木製品2点(第16図6・7)が出土している。

6は一方を欠き、もう一方は先端部を尖らせており杭状を呈する。長さ52.3cm、幅7.0cm、厚さ4.5cmを測る。7は板状を呈する。長さ19.5cm、幅10.0cm、厚さ0.6cmを測る。

第5号井戸跡 (第15・16図)

F区北西部の、L-63グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は漏斗状を呈する。開口部径1.60m×1.45m、中段部径1.04m×1.01m、底面径0.65m×0.63m、確認面からの深さ1.91mを測る。素掘り。青磁碗の破片(第16図2)と、漆碗の破片が(同図3・4)、阿玉台期の土器片、および板碑の破片の可能性をもつ緑泥片岩2点を含む石が十数点出土している。3と4は植物を図柄としていると推定されるが、同一固体か否かは不明である。



第15図 井戸跡

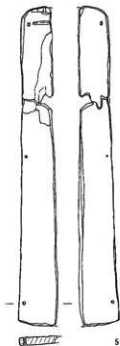
SE1



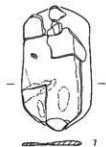
SE5



SE3



SE4



第16図 井戸跡出土遺物

(3) 溝跡

第1号溝跡 (第17・18図)

F区の、J-66、K-64~66グリッドに位置する。第27・31号土壌に切られる。N-109° - Eの向きで、東西に走る。全長24.92m、幅0.85~1.23m、深さ0.05~0.10mを測る。陶器の小破片2点と礫が少数出土したが、図化し得たのは1点であった。

第2号溝跡 (第18図)

F区の、J-65・66、K-64~66、L-63・64グリッドに位置する。溝の大半が第29・31~34・36号土壌、第3号井戸跡に切られている。N-125° - Eの向きで東西方向に走る。全長29.50m、幅0.07~0.58m、深さ0.07~0.09mを測る。須恵器や陶器の小破片や礫が少数出土したが、図化には至らなかった。

第3号溝跡 (第18図)

F区の、L-63・64グリッドに位置する。第4号井戸跡・L-63グリッドP1・L-64グリッドP4に切られている。N-124° - Eの向きで東西方向に走る。

全長9.28m、幅0.73m、深さ0.05~0.09mを測る。粘土塊が1点出土したが、図化には至らなかった。

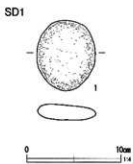
第4号溝跡 (第18図)

F区の、L-63・64グリッドに位置する。両端ともに失われており、途中も一部途切れていると思われる。検出し得た範囲内で、長さ3.89m、幅0.22~0.64m、深さ0.03~0.05mを測る。N-50° - Wの向きで北西から南東方向に走る。遺物は出土しなかった。

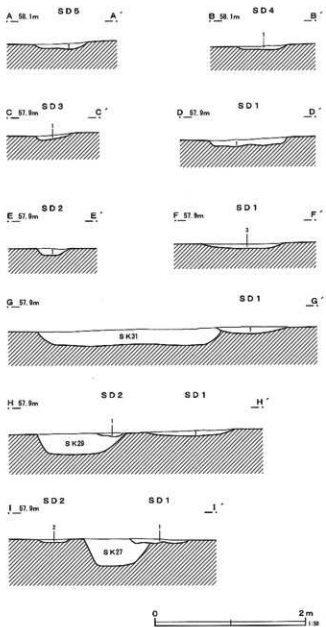
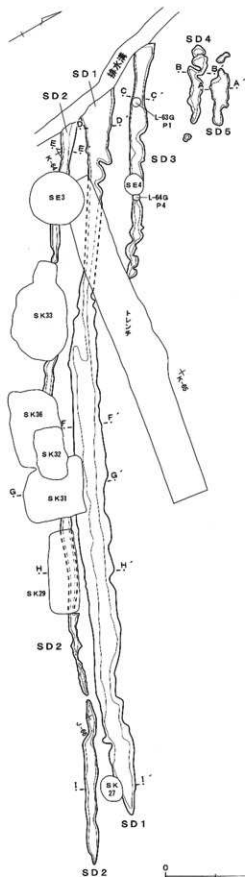
第5号溝跡 (第18図)

F区の、L-63・64グリッドに位置する。両端ともに失われており、途中も一部途切れていると思われる。検出し得た範囲内で、長さ2.93m、幅0.25~0.74m、深さ0.05~0.08mを測る。N-54° - Wの向きで北西から南東方向に走る。

両端部ともに調査区外に続いており、長さは不明である。検出し得た範囲内では、長さ15.0m、上幅0.55~1.40m、下幅0.28~0.55mを測る。遺物は出土しなかった。



第17図 第1号溝跡出土遺物



- SD 1**
 1 黑色土 粘性・しまり弱
 2 黒褐色土 粘性・しまり弱
 3 黑色土 地山の褐色土が覆状に覆じる 粘性・しまり弱
- SD 2**
 1 黑色土 地山の褐色土が覆状に覆じる 粘性・しまり弱
 2 黒褐色土 粘性・しまり弱
- SD 3**
 1 黒褐色土 粘性やや有 しまり有
- SD 4**
 1 褐色土 ローム粒少 粘性・しまり弱
- SD 5**
 1 褐色土 粘土粒微量 ロームブロック少 粘性・しまり弱

第18図 溝跡

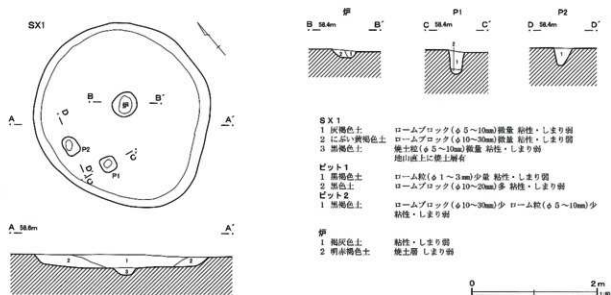
(4) 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (第19図)

E区南部のK-67グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は底部が比較的平坦な皿状を呈する。

規模は長軸3.05m、短軸2.81m、深さ0.22mを測る。遺構内では炉と推定される遺構と、2基のピットが

確認されている。各々の規模は、炉が0.41m×0.40m、深さ0.12m、P1が0.25m×0.24m、深さ0.40m、P2が0.32m×0.24m、深さ0.28mを測る。礫5点が出土しているが、図化には至らなかった。



第19図 竪穴状遺構

(5) ビット

検出されたビットは、D区で2基、E区で1基、F区で23基の、計26基である。地点的にはF区内のL-64グリッドに21基が集中している。以下に各ビットの平面形・断面形と、規模を長径×短径×深さ(cm)の順に列記していく。なお、ビット番号については、グリッドごとにP1から命名した。

D区

R-58グリッド (第22図)

P-1は、平面円形、断面碗形、規模は43cm×33cm×17cmを測る。

R-59グリッド (第22図)

P-1は、平面円形、断面逆台形、規模は46cm×44cm×32cmを測る。

E区

M-68グリッド (第22図)

P-1は、平面楕円形、断面逆台形、規模は53cm×38cm×23cmを測る。

F区

J-65グリッド (第22図)

P-1は、平面楕円形、断面皿形、規模は40cm×37cm×5cmを測る。

L-63グリッド (第22図)

P-1は平面円形、断面碗形、規模は36cm×35cm×18cmを測る。

L-64グリッド (第20・21・23図)

P-1は、平面円形、断面碗形、規模は25cm×23cm×6cmを測る。P-2は平面円形、断面U字形、規模は30cm×27cm×21cmを測る。P-3は平面円形、断

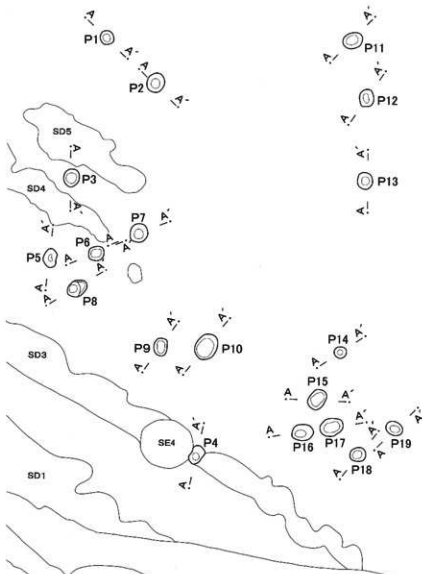
面U字形、規模は30cm×26cm×22cmを測る。遺構内より、壺の破片が1点(第23図13)出土した。口径(90)cm、残存高4.3cm、常滑産、12世紀後半。

P-4は、平面不整形、断面碗形、規模は30cm×20cm×14cmを測る。P-5は、平面楕円形、断面碗形、規模は30cm×21cm×13cmを測る。P-6は、平面円形、断面碗形、規模は26cm×22cm×15cmを測る。

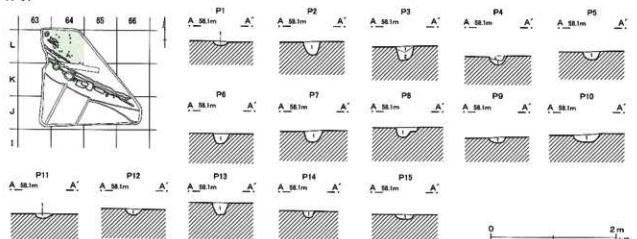
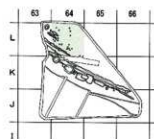
P-7は、平面円形、断面碗形、規模は30cm×29cm×17cmを測る。P-8は、平面楕円形、断面不整形、規模は35cm×26cm×15cmを測る。P-9は、平面楕円形、断面碗形、規模は28cm×22cm×7cmを測る。

P-10は、平面楕円形、断面碗形、規模は45cm×34cm×13cmを測る。P-11は、平面円形、断面碗形、規模は33cm×26cm×7cmを測る。P-12は、平面円形、断面碗形、規模は27cm×22cm×10cmを測る。

P-13は、平面円形、断面U字形、規模は26cm×24cm×18cmを測る。P-14は、平面円形、断面碗形、規模は19cm×19cm×11cmを測る。P-15は、平面楕円形、断面皿形、規模は23cm×26cm×8cmを測る。P-16は、平面楕円形、断面皿形、規模は35cm×26cm×8cmを測る。P-17は、平面楕円形、断面逆台形、規模は39cm×28cm×12cmを測る。P-18は、平面円形、断面碗形、規模は26cm×22cm×13cmを測る。P-19は、平面楕円形、断面U字形、規模は28cm×22cm×13cmを測る。P-20は、平面円形、断面碗形、規模は27cm×26cm×11cmを測る。P-21は、平面円形、断面U字形、規模は21cm×20cm×20cmを測る。



K-64



第20図 ビット (1)

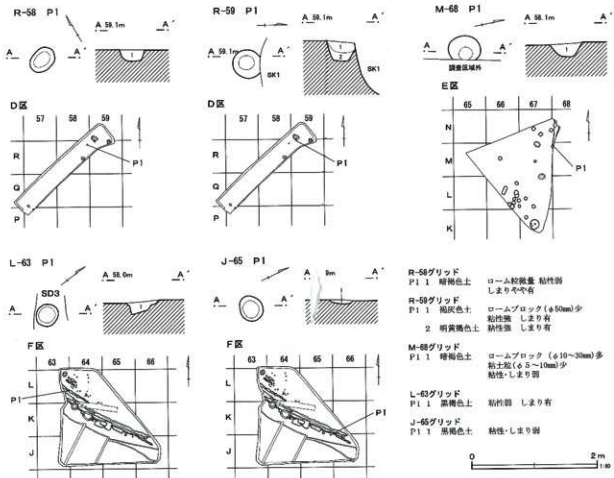


L-64グリッド

- P1 1 黒褐色土 ローム粒(φ3~5mm)少 粘土粒微量 粘性弱 しまり有
 P2 1 黒色土 粘土粒(φ2~3mm)・粘土ブロック・炭化物φ3mm微量 粘性弱 しまり有
 P3 1 黒褐色土 ロームブロック(φ20~30mm)微量 粘性弱 しまり有
 2 黒色土 粘性弱 しまり有
 P4 1 灰黄褐色土 ローム粒(φ1~2mm)微量 粘性・しまり弱
 P5 1 褐色土 ローム粒(φ5~10mm)量 粘土粒微量 粘性・しまり弱
 P6 1 褐色土 粘土ブロック(φ10~20mm)微量 粘性弱 しまり有
 P7 1 灰黄褐色土 ローム粒(φ1~2mm)微量 粘性弱 しまり有
 P8 1 灰黄褐色土 ローム粒(φ3~5mm)少 粘性弱 しまり有
 P9 1 黒褐色土 ローム粒(φ2~3mm)微量 粘性・しまり弱
 P10 1 褐色土 ロームブロック(φ20~30mm)少 粘性弱 しまり有

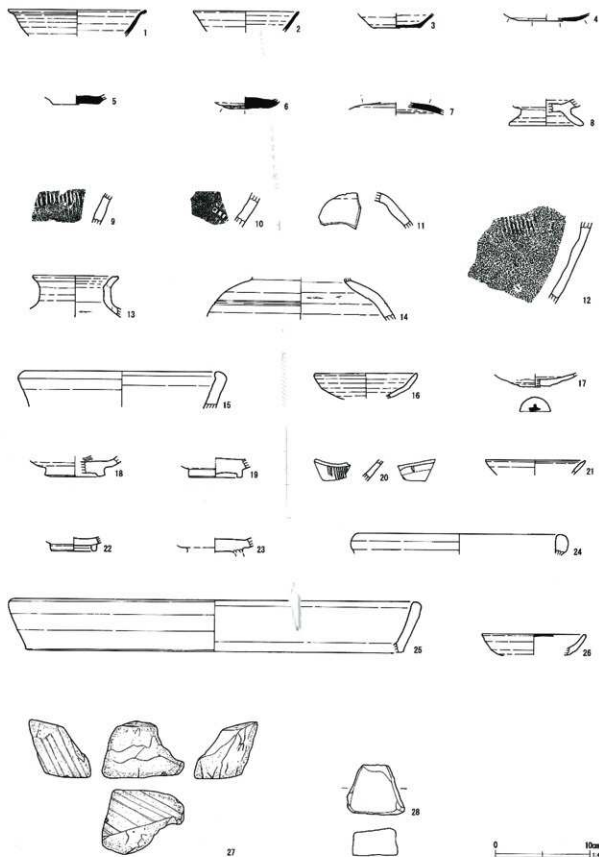
- P11 1 灰黄褐色土 粘性弱 しまり有
 P12 1 黒褐色土 ローム粒(φ2~3mm)微量 粘性弱 しまり有
 P13 1 灰黄褐色土 粘土粒(φ1~2mm)微量 粘性弱 しまり有
 P14 1 灰黄褐色土 粘土粒(φ2~3mm)微量 粘性弱 しまり有
 P15 1 黒褐色土 ローム粒(φ1~2mm)微量 粘性弱 しまり有
 P16 1 黒褐色土 ローム粒(φ1mm)微量 粘性弱 しまり有
 P17 1 灰黄褐色土 ローム粒(φ1~2mm)量 粘性弱 しまり有
 P18 1 黒褐色土 ロームブロック(φ1~2mm)微量 粘性弱 しまり有
 P19 1 灰黄褐色土 ローム粒(φ1~2mm)微量 粘性弱 しまり有
 P20 1 黒褐色土 粘土粒(φ1mm)微量 粘性弱 しまり有
 P21 1 黒褐色土 ローム粒(φ1mm)微量 粘性弱 しまり有

第21図 ビット (2)



- R-58グリッド
 P1 1 暗褐色土 ローム粒微量 粘性弱 しまり有
 2 明黄褐色土 粘性弱 しまり有
 R-59グリッド
 P1 1 褐色土 ロームブロック(φ50mm)少 粘性強 しまり有
 2 明黄褐色土 粘性強 しまり有
 M-68グリッド
 P1 1 暗褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)多 粘土粒(φ5~10mm)少 粘性・しまり弱
 L-63グリッド
 P1 1 黒褐色土 粘性弱 しまり有
 J-65グリッド
 P1 1 黒褐色土 粘性・しまり弱

第22図 ビット (3)



第23図 グリッド・表探出土遺物

(6) グリッド出土遺物

グリッド出土遺物・調査区一括遺物等を第23・24図に掲載する。D区からは、遺物は出土していない。E区も遺物の出は少なく、図化できたのは2点である。大部分の遺物が出土したのはF区であった。文字や文様などが無いため図化には及んでいないが、板碑片と思われる石材が大量に出土している。



第24図 E区出土遺物

第2表 F区出土遺物観察表(第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器	高台付埴か	(14.5)	(2.8)	—	5.6	破片	普通	灰	J-65gNo11 気泡多
2	須恵器	埴	(11.3)	(2.2)	—	5.8	破片	普通	灰	J-65gNo15 鳩山産
3	須恵器	埴	—	(1.6)	(5.0)	16.1	15	普通	灰	J-64gNo1 鳩山産
4	須恵器	埴	—	(0.8)	(6.0)	6.2	破片	普通	灰	J-64gNo4 鳩山産
5	須恵器	埴	—	(1.0)	(5.0)	—	破片	普通	灰	K-63g一括 谷部
6	須恵器	埴	—	(1.2)	5.5	53.4	20	普通	灰	鳩山産
7	須恵器	蓋	—	(1.3)	—	11.0	破片	普通	灰黄褐色	谷部 鳩山産
8	古代	高台付埴か	—	(2.8)	(8.0)	27.8	破片	普通	灰	J-64gNo15.柱状高台付土師質里か
9	常滑	甕	—	—	—	27.6	破片	普通	灰黄褐色	表探
10	常滑	甕	—	—	—	21.9	破片	普通	灰	J-65gNo12
11	常滑	甕	—	—	—	24.1	破片	普通	灰オリーブ	K-63gNo1 外面釉薬付着
12	常滑	甕	—	—	—	141.6	破片	普通	灰	J-65gNo9 釉薬付着 被熱か 13世紀代
13	常滑	甕	(9.0)	(4.3)	—	22.6	破片	普通	灰	L-64gP3 釉薬付着 12世紀後半
14	常滑	三筋壺	—	(4.5)	—	92.4	破片	普通	灰オリーブ	J-66gNo2 12世紀後半
15	陶器	在地鉢	(20.6)	(3.8)	—	32.7	破片	普通	黒	中世
16	土師質	カラワケ	(10.8)	(2.6)	—	13.9	破片	普通	灰	J-63gNo1 手づくね 13世紀前半
17	瀬戸か	皿	—	(1.4)	(3.2)	15.9	20	普通	浅黄	K-64gNo3 底部墨書 漆継ぎ痕あり 内面全面釉薬
18	青磁	碗	—	(2.1)	(6.4)	31.5	破片	普通	オリーブ灰	J-65gNo10 13世紀代
19	青磁	碗か	—	(2.1)	5.6	71.6	15	普通	黄褐色	K-64gNo6 龍泉窯 13世紀代
20	青磁	碗か	—	(2.2)	—	7.1	破片	普通	オリーブ黄	K-64gNo2 漆継ぎあり 阿安窯
21	白磁	皿か	(10.5)	(1.6)	—	4.2	破片	普通	灰白	谷部 J-65g 釉薬付着
22	天目	碗か	—	(1.5)	(4.9)	10.7	破片	普通	灰	表探 内面釉薬
23	磁器	—	—	—	—	31.9	破片	普通	オリーブ黄	K-64g 内面釉薬 中世か
24	瀬戸	片口鉢	(21.8)	(2.2)	—	29.8	破片	普通	灰オリーブ	一括
25	陶器	焙烙	(43.0)	(5.3)	(40.3)	57.5	破片	普通	黒	一括 江戸時代
26	陶器	皿か	(10.9)	(2.2)	—	10.9	破片	普通	灰黄	一括 志野織部
27	石製品	用途不明品	長さ8.6幅6.0厚さ4.7重さ274.3	—	—	—	—	—	—	一括
28	石製品	砥石	長さ6.1幅5.2厚さ2.5重さ139.2	—	—	—	—	—	—	J-64gNo9

第3表 E区出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	残存(%)	焼成	色調	出土位置・備考
1	瀬戸	埴	—	(3.9)	—	18.8	破片	普通	オリーブ黄	一括 内面漆付着 中世前半
2	江戸	火鉢	—	(4.6)	—	38.5	破片	普通	灰	一括

第4表 日向遺跡新旧対照表

遺構	新番号	旧番号	遺構	新番号	旧番号	遺構	新番号	旧番号	遺構	新番号	旧番号	遺構	新番号	旧番号	遺構	新番号	旧番号			
SK	1	101	SK	13	113	SK	25	125	SE	1	1	SX	1	1	L-64	P-11	P-12	R-58	P-1	P-1
	2	102		14	114		26	126		2	2					P-12	P-13			
	3	103		15	115		27	127		3	3	L-64	P-1	P-1		P-13	P-14	R-59	P-1	P-1
	4	104		16	116		28	128		4	4		P-2	P-2		P-14	P-15			
	5	105		17	117		29	129		5	5		P-3	P-3		P-15	P-16	M-68	P-1	P-1
	6	106		18	118		30	130					P-4	P-4		P-16	P-17			
	7	107		19	119		31	131	SD	1	14		P-5	P-5		P-17	P-18	L-63	P-1	P-1
	8	108		20	120		32	132		2	15		P-6	P-6		P-18	P-19			
	9	109		21	121		33	133		3	16		P-7	P-7		P-19	P-20	J-65	P-1	P-1
	10	110		22	122		34	134		4	17		P-8	P-8		P-20	P-21			
	11	111		23	123		35	135		5	18		P-9	P-10		P-21	P-22			
	12	112		24	124		36	136					P-10	P-11						

V 調査のまとめ

ここに報告する当事業団の第2次調査（以下、事業団2次調査と表現する）の調査地点は、小川町教育委員会による1次調査（以下、町教委1次調査と表現する）の調査地点に隣接している（第3・25図）。

検出された遺構と遺物は、土壇36基、溝跡5条、井戸跡5基、竪穴状遺構1基、ピット26基であり、縄文土器・石器、中近世の青磁碗・陶磁器・カワラケ・漆棺のほか、木製板材や板碎片などが出土した。なお、住居跡は確認されていない。

町教委1次調査では、中世のものと推定される掘立柱建物跡1棟、13世紀中葉～後半におさまる井戸跡7基をはじめとして、土壇100基・溝跡15条などが検出され、縄文土器・石器のほか、中近世の瓦質土器・陶磁器・カワラケ・鉄製品などが出土した。町教委1次調査地点については、住居跡は検出されていないが、掘立柱建物跡1棟が検出されている。

微地形的にみて、事業団2次調査の調査地点は、町教委1次調査地点と同様に、低台地状の丘陵を下りきった市野川の河岸段丘上に位置している。そして、検出された遺構については、ともに中世の土壇と井戸跡を中心としており、内容的に同じ性格をもつと考えられる。

なお、この問題と直接には関連しないものの、船載陶磁器を含むさまざまな中世遺物が出土しており、その多くが小破片である、という事実は何に起因するのであろうか。同様な内容をもつ他遺跡に共通するの否か。この点については、疑問点として掲げるとともに類例を待ちたい。

そこで、町教委1次調査での成果から、事業団2次調査地点についての内容を、少しではあるが検討してみたいと思う。

町教委1次調査では、土壇から常滑甕、石硯、青磁碗の破片などが少量出土しているが、遺構数からみて、遺物の出土は全体的に非常に少ないといえる（高橋・保田1996）。

整理報告者は、前掲書中において土壇の形態から、A類：（長）方形または隅丸（長）方形、B類：楕円形または円形、C類：不定形の3つに分類された。

そしてA類については、2つのタイプに細分された。即ち、A-1類：覆土は茶褐砂質土基調とする。B-2類：黒色または濃茶褐色粘質土を基調とし、長大で深いものも存在する。

A類は、軸方向が等高線と併行または直行し、なおかつ数基ずつが重複し、集中して分布する傾向がある。これに対して、B・C類にはこうした傾向は認められない。

A-1類の71号土壇からは13世紀後半と考えられるカワラケが、A-2類の69号土壇からは近世と思われる破片が出土している。B・C類については、時期的な区別は認められない。

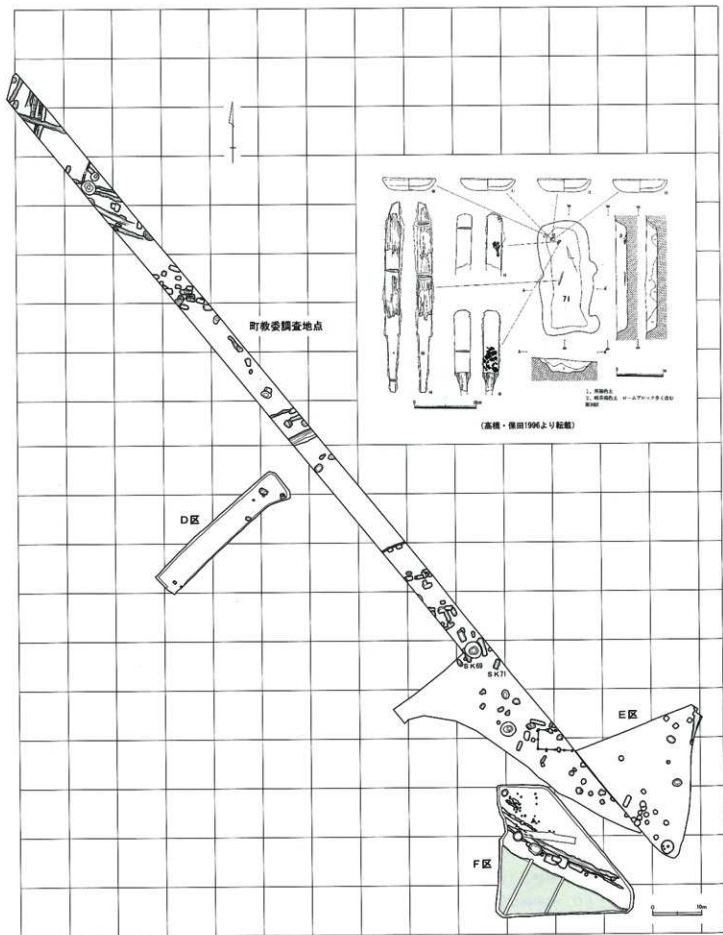
なおこれらの土壇のうち、A-2類の中には「サツマドコ」と呼ばれる貯蔵穴の可能性をもつもの、C類の中には風倒木痕の可能性をもつものがある、と述べられている。

そういった土壇の中で、報告者は71号土壇（第25図）を特に注目された。

71号土壇は、規模が23×13mの隅丸楕円形を呈し、遺構確認面からの深さは約20cmを測る。主軸方向は、N-20°-Eを指す。

遺構内からは、底面から5cmほど浮いた状態で遺物が出土している。土壇の北西コーナーからカワラケ4点が出土した。そのうちの3点は、正位の状態で重なっており、残りの1点は壁面に寄りかかるようにして検出された。それよりもやや内側からは、2点の不明鉄製品が重なっており検出され、さらに土壇中央よりやや西寄りでは、刀子が切先を南に向けた状態で出土した。なお、カワラケの時期は、13世紀後半である。

報告者は、遺構の形態、遺物の時期と出土状況などから、13世紀後半の「北枕西向（側臥合掌）」を想



第25図 小川町教委1次・事業団2次調査地点

起させる土壌墓と推測された。71号土壌以外の土壌の性格については、遺物が出土していないため判断できないものの、小川町台ノ前遺跡や嵐山町行司免遺跡の中世土壌などの例をひき、ひとつの可能性として墓塚の存在を示唆された。さらに、これらの土壌を検討するにあたって、「両墓制」の可能性についても考慮する必要があると述べておられる。

次いで、事業団2次調査地点の土壌をみていきたい。平面形は、(長)方形または隅丸(長)方形のもの、楕円形もしくは円形のもの、不定形のものがあり、町教委1次調査地点の土壌と同様である。しかし、C類の土壌については、基本的に、A類もしくは、B類のものが重んでいる結果であると推測される。

また、規模や方位についても、町教委1次調査地点の土壌に類似しているといえよう。さらに、数基の土壌が重複する例が存在するのと同様である。

出土遺物についても、非常に少なく、時期的に中世である点でも共通している。因みに、町教委1次調査地点の土壌や井戸跡からは、13世紀中葉～後葉の常滑焼が出土している。そして、事業団2次調査地点では、第36号土壌から13世紀前半のカワラケが出土している。この他にも、遺構外からではあるが、常滑産の12世紀後半の三筋壺、13世紀代の甕のほか、同じく13世紀代の青磁片、龍泉窯系の破片、さらに13世紀前半のカワラケなどが出土している。また、時期は特定できないものの、蓮弁をもつ同安窯系の碗(か)の破片が検出されている。

遺物をはじめとして、判断材料が根拠きわめて乏しい中での仮定といわざるを得ないが、これらの土壌に関しては、墓塚の可能性をもつものが存在すると思われる。そして、町教委1次調査地点の土壌についても、報告者の所見に同じく、墓塚の可能性をもつものがあると考えられる。

既述のように、町教委1次調査地点、事業団2次調査地点ともに、住居跡は確認されず、前者で掘立柱建物跡1棟が確認されたにとどまる。そのため、

集落内・集落外のいずれであるかは不明であるが、両地点は12～13世紀をはじめとした、中世の墓塚の一面に位置していると推定される。その場合、時期的にみて井戸は墓域内に存在した可能性が高いが、どのような意味をもつ井戸であったのか、この点については、関心もたれるところである。しかし、ここではこれ以上述べるだけの材料がない。

小川町教育委員会と当事業団による調査結果からみて、集落域は日向遺跡の推定範囲の大部分を占める低丘陵上に立地していると考えられる。町教委2・3・5次調査地点は、低丘陵上に位置しており、何らかの空間を画していると思われる。この空間はどのような性格なのであろうか。この点に関しても、これ以上の言及はできない。

この低丘陵は、東西に展開しており、この丘陵上を鎌倉街道上道が概ね南北に縦断している。

日向遺跡は多時期に跨るが、中世を中心にみると、カワラケや在産片口鉢、常滑焼のほか、青磁や白磁、漆碗ほかが出土している。しかし、これは日向遺跡に限らず、位置的に鎌倉街道上道に近い遺跡における、中世の様相として少なからず見受けられる傾向である。そして、この点に関しては、すでに小川町教育委員会による調査報告書の中でも再三にわたって指摘されている事柄である。

今回の調査結果は、上記の内容に関して、さらなる資料を付け加えたといえる。今後、日向遺跡およびその周辺地域、さらには鎌倉街道上道沿線に調査の手が入れば、往時の様相がより一層明らかになってくるものと期待される。それによって、鎌倉街道上道のもった意味の大きさが、より鮮明になってくるといえよう。なお、地形図を眺めてみると、事業団2次調査地点から北東約300mに「宿」、南東約300mに「本宿」という地名が見受けられる。これについては、鎌倉街道上道の名残りともいふべき地名であろうか。図上には、道らしき表現はない。これは、痕跡の失われた結果と推測される。

引用・参考文献

- 浅野晴樹 2006『鎌倉街道の考古学』〔鎌倉時代の考古学〕高志書院
- 植木 弘 1988『行司免遺跡』嵐山町遺跡調査会報告4 嵐山町遺跡調査会
- 金子直行・昼間孝志 2001『大木前／小栗北／小栗／日向』埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第259集
埼玉埋蔵文化財調査事業団
- 栗原伸道 1983『鎌倉街道Ⅰ 歴史編』有峰書店新社
- 小林 高 2004『推定鎌倉街道上道一赤浜天神沢遺跡の発掘調査から探る男衾塚田宿一』〔中世のみちを探る〕高志書院
- 埼玉県教育委員会 1983『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書第一集 埼玉県立歴史資料館
- 高橋好信 保田義治 1996『日向遺跡発掘調査報告書』小川町埋蔵文化財調査報告書第7集 小川町教育委員会
- テレビ埼玉(編) 2001『鎌倉街道夢紀行 上道コース』さきたま出版会
- 峰久敬啓 1983『鎌倉街道Ⅳ 古道探訪編』有峰書店新社
- 吉田義和 2001『町内遺跡発掘調査報告書Ⅵ 八幡台遺跡(9次)八幡台遺跡(10次)広見東遺跡(1次)日向遺跡(2次)中井遺跡(2次)』小川町埋蔵文化財調査報告書第16集 小川町教育委員会
- 吉田義和・新井 貴 2002『町内遺跡発掘調査報告書Ⅶ 日向遺跡(3次)町場遺跡(3次)』小川町埋蔵文化財調査報告書第17集 小川町教育委員会
- 吉田義和・新井 貴 2003『町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ 八幡台遺跡(11次)八幡台遺跡(12次)八幡台遺跡(13次)八幡台遺跡(14次)八幡台遺跡(15次)日向遺跡(5次)日向遺跡(6次)中井遺跡(3次)』小川町埋蔵文化財調査報告書第19集 小川町教育委員会
- 吉田義和・新井 貴 2003『日向遺跡(4次)』小川町埋蔵文化財調査報告書第20集 小川町教育委員会
- 吉田義和・新井 貴 2004『町内遺跡発掘調査報告書Ⅹ 中井遺跡(5次)中井遺跡(6次)日向遺跡(7次)』小川町埋蔵文化財調査報告書第21集 小川町教育委員会

写真図版





D区全景 (南西から)

1



E区全景 (南から)

2



1 F区全景 (南東から)

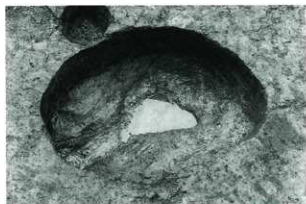


2 F区谷部 (北西から)



1

L-64グリッドP4



2

第1号土塊



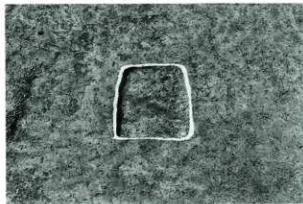
3

第2号土塊



4

第3(手前)・4号土塊



5

第5号土塊



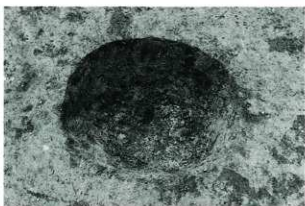
1 第10号土壤



2 第11号土壤



3 第12号土壤



4 第13号土壤



5 第14号土壤



6 第15号土壤



7 第18号土壤

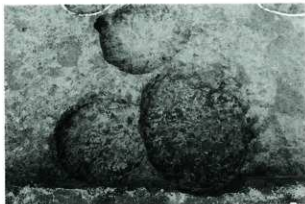


8 第19号土壤



1

第22号土壤



2

第23 (右) · 24号土壤



3

第27号土壤



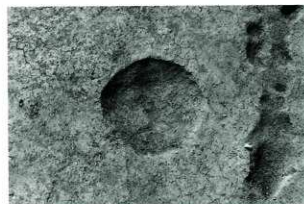
4

第28号土壤



5

第29号土壤



6

第30号土壤



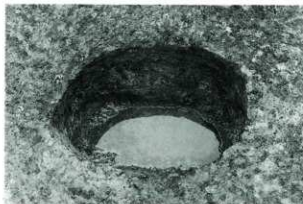
7

第33 (左) · 34号土壤

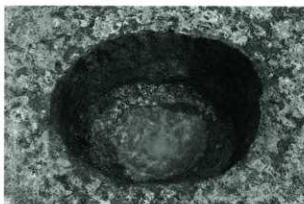


8

第35号土壤



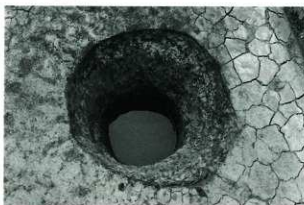
1 第1号井戸跡



2 第2号井戸跡



3 第4号井戸跡



4 第5号井戸跡



5 第1号整穴状遺構



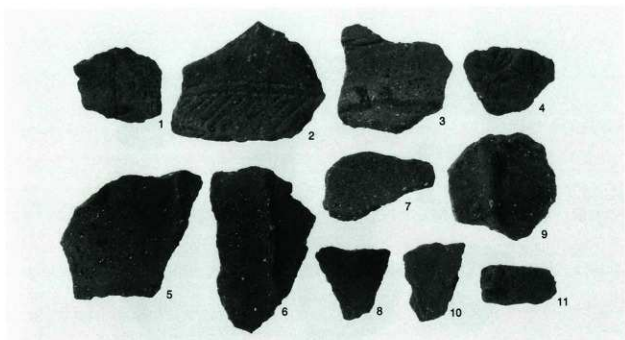
6 L-64グリッドP7



7 L-64グリッドピット群 (西から)



8 F区溝跡 (西から)



1 縄文土器 1 SD14 (第10図1)、2 表採 (第10図2)、3 F区 (第10図3)、4 SK29 (第10図4)、5 SE4 (第10図6)、6 SE4 (第10図5)、7 SE4 (第10図7)、8 SE4 (第10図8)、9 F区 (第10図9)、10 K64G P7 (第10図11)、11 SK31 (第10図10)



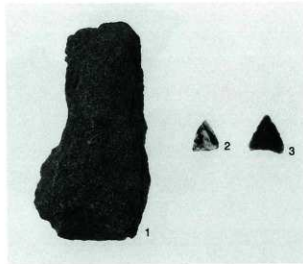
2 縄文土器 L64G P4 (第9図)



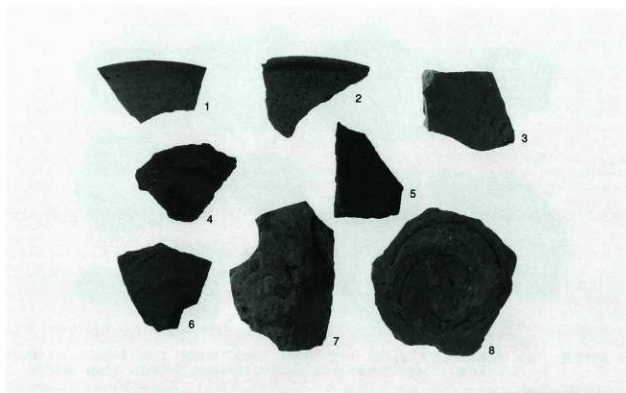
3 敲石 SK31 (第10図13)



4 凹石 SK29 (第10図14)

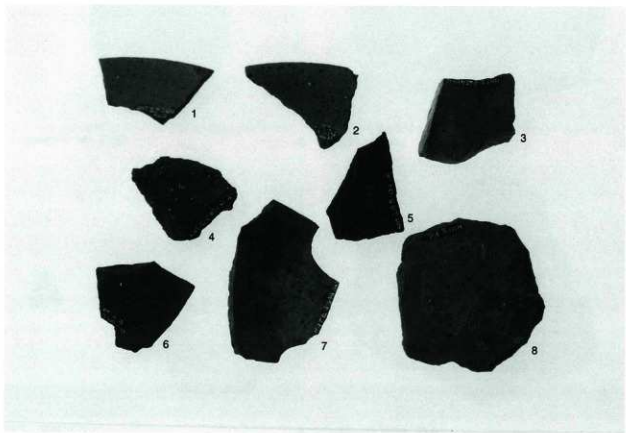


5 打製石斧・石鏃
1 F区 (第10図12)、2 J66G (第10図16)、3 J65G谷 (第10図15)

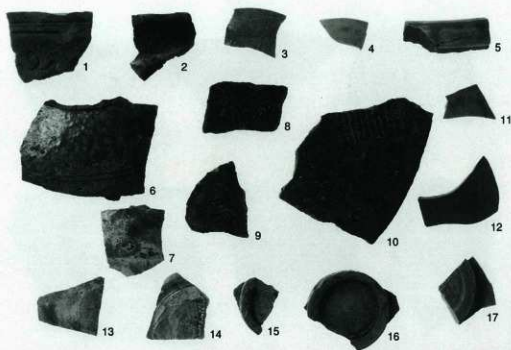


1 須惠器 (外面)

1 J65G (第23図2)、2 J65G (第23図1)、3 J65G (第23図10)、
 4 J64G (第23図4)、5 K63G谷 (第23図5)、6 K63G谷 (第23図7)、
 7 J64G (第23図3)、8 F区 (第23図6)



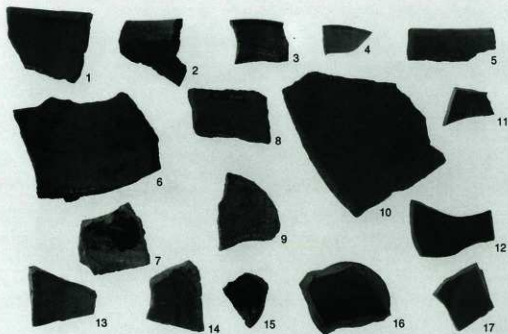
2 須惠器 (内面)



1

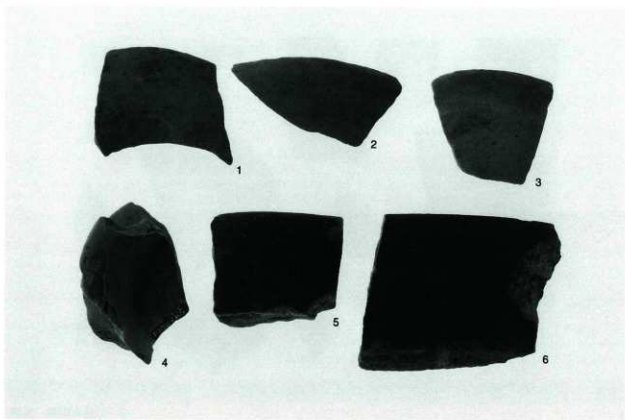
中·近世陶磁器 (外面)

1 E区 (第24图2)、2 L64G P3 (第23图13)、3 F区 (第23图26)、4 J65G谷 (第23图21)、
5 F区 (第23图24)、6 J66G (第23图14)、7 E区 (第24图1)、8 F区 (第23图9)、9 K63G (第23图11)、
10 J65G (第23图12)、11 K64G (第23图20)、12 SK33 (第14图1)、13 K64G (第23图17)、
14 K64G (第23图23)、15 F区 (第23图22)、16 K64G (第23图19)、17 J65G (第23图18)



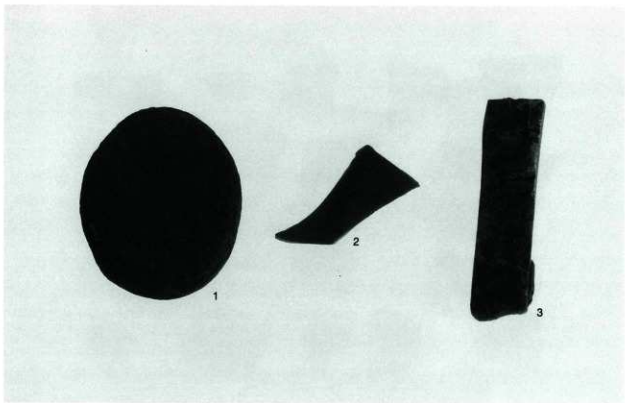
2

中·近世陶磁器 (内面)



1 中・近世陶器

1 SK36 (第14図3)、2 SK36 (第14図2)、3 J63G (第23図16)、
4 J64G (第23図8)、5 F IX (第23図15)、6 F区 (第23図25)



2 井戸跡・溝跡出土遺物

1 SE1 (第17図1)、2 SE5 (第16図2)、3 SD1 (第16図1)

報告書抄録

ふりがな	ひなたいせき							
書名	日向遺跡Ⅱ							
副書名	地方特定道路(改築)整備工事(埋蔵文化財発掘調査(整理)業務委託)報告 主要地方道熊谷小川秩父線/比企郡小川町中爪地内							
巻次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第332集							
編著者名	鈴木 孝之							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2007(平成19)年2月26日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
日向遺跡 第2次調査	埼玉県比企郡 小川町大字中爪 字覆戸126-1番地 他	35	021	36° 03′ 44″	139° 18′ 17″	20020408) 20020531	1,735	県道建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
日向遺跡 第2次調査	集落跡	縄文時代中期 中近世	土壌 溝跡 井戸跡 竪穴状遺構 ピット	36基 5条 5基 1基 26基	縄文時代：土器・石器 中近世：青磁碗・陶磁 器・カワラケ・漆碗・ 木製板材			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第332集

比企郡小川町

日向遺跡Ⅱ

地方特定道路(改築)整備工事(埋蔵文化財発掘調査(整理)業務委託)報告
主要地方道熊谷小川秩父線/比企郡小川町中爪地内

平成19年2月12日 印刷

平成19年2月26日 刊行

発行/財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

電話 0493(39)3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷/太陽美術